

表紙, 目次, 雑纂, 漫録, 通信

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/38575 |

明治三十八年一月一日發行

十全會雜誌

第三十六號



(非質品)

全澤醫齒學專門學校十全會

十全會雜誌第三十六號目次

○原著及實驗……………自一頁

○結節狀増殖ヲ有スル肝臟始ト
全体ノ變造ノ一例(圖解挿入)……………特別會員 山碕幹原著
十全會 雜誌部員譯

○子宮筋腫ト子宮癌腫トノ統計
的比較第一回調査報告(承前)……………特別會員 小川勝陳共述
特別會員 八田智証

○糖尿鑑識ノ一法タル Phenyl-
hydrazinprobe.(承前)……………特別會員 島田吉三郎

○雜纂……………自四五頁

○原發性腸結核?……………醫學科四年級 渡邊 暲

○漫錄……………自六一頁

○訣別の記……………雨 城

○破調集……………雨 橋

○會報……………自六四頁

○叙任及辭令○卒業式○十全會大茶話會○金子教授の歸校式○校歌○解剖
遺体法會○長距離競争○會員動靜

○通信……………自七三頁

○佐々木達君通信第三……………全 上 第四

○木村博士の書信
○松原氏米國雜信
○笠橋吉郎君の通信
○松田研吉君の通信
○贊助會員松王敷男君の通信
○木下克雄君の通信
○三野賢吉君の通信

○會告……………自九二頁

○交換雜誌及寄贈書目○十全會々費領取

○廣告



原稿ノ切と豫告

次回發刊の第三十七號原稿は
二月十五日までに切三月上
旬刊行す、奮て御投稿あらん
ことを希ふ

征露第二年元旦 十全會雜誌部

迎 歲 の 辭

つ。の。ぐ。み。出。づ。べ。き。春。の。な。よ。び。姿。は。雪。の。母。胎。に。藏。る。れ。ご。も。歳。は。復。立。ち。か。へ。り。て。新。た。なる。日。影。の。若。水。に。さ。し。添。ふ。ぞ。め。で。た。け。れ。さ。れ。ご。羅。甸。の。古。き。諺。に。も。生。命。は。短。く。學。藝。は。永。し。こ。い。へ。り。し。を。懷。へ。ば、初。陽。の。あ。ゆ。み。紅。霞。の。た。ゆ。た。ひ。に。對。し。て。更。に。倦。驚。鞭。影。に。驚。く。の。感。な。く。む。ば。あ。ら。ず。

今や我邦家は海に陸に威武已に敵國を壓して西力東漸の勢を扼し、優に政治上に於て東亞の覇たるにあらずや。窃に思ふに學界の進歩亦更にこの國運の隆昌と相俟ち相扶けて圓滿なる人文の發展を遂げしむるに勉めざらめやは。

人は本邦醫學の長足なる進歩を誇稱すといへども之を歴史的に追究すれば西歐の學藝を輸入するに方り醫學の特り最初に獎勵せられしを以て聊か他の學術に比肩して一步を先じたるが如き觀あるのみ、吾等の把るランチェットは猶幾多の秘奥

の肉塊を剩し、吾等の照す顕微鏡は猶幾多有毒の細菌を逸せずとなさず。吾等の年を迎ふるを喜ふの意味は只新しき研究によりて新たなる貢獻を人生に齎らさんが爲なるのみ。こゝに明治三十八年を迎ふるに當り聊か吾等の志を言ふ（笹岡芳名筆）

征露第二之春一月元旦

廣 告

謹 而 賀 新 年

金澤醫學專門學校

明治三十八年正月元旦

高安 右人
櫻井 小平太
大西 克孝

謹 而 賀 新 年

明治三十八年正月元旦

小川 勝陳
下平 用彩

恭 賀 新 年

在大坂

明治三十八年正月元旦

木村 孝藏

謹 賀 新 年

明治三十八年正月元旦

在獨乙

佐々木 達

謹 賀 新 年

明治三十八年一月一日

金澤市里見町

金子 治郎

追啓小生儀以御蔭舊臘無事歸校仕候ニ付
乍畧儀此段謹告仕候也

恭 賀 新 年

金澤醫學專門學校

一月元旦

石川 喜直

謹 賀 新 年

明治三十一年一月元旦

十全會雜誌部

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 金 | 曾 | 赤 | 岡 | 池 | 野 | 吉 | 笹 | 有 | 渡 | 宇 | 野 | 松 | 宮 |
| 嘉 | 岡 | | | | 部 | 村 | | 岡 | 壁 | | 野 | 崎 | 田 | 田 |
| 孝 | 清 | 根 | 松 | 勝 | 正 | 義 | 野 | 芳 | 一 | 邊 | 益 | 芳 | 菊 | 篤 |
| 之 | 彦 | 章 | 省 | 重 | 鑿 | 雄 | 要 | 名 | 雄 | 彊 | 之 | 孝 | 治 | 郎 |

恭 賀 新 年

明治三十一年一月元旦

十全會講話部

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 數 | 久 | 溝 | 中 | 小 | 平 | 高 | 藤 | 杉 | 谷 | 佐 | 金 | 上 |
| 見 | 田 | 口 | 谷 | 林 | 澤 | 野 | 井 | 部 | 澤 | 々 | 原 | 田 |
| 宗 | | 龍 | 內 | | 嘉 | 宗 | 保 | 多 | 一 | 木 | 三 | 計 |
| 一 | 德 | 三 | 善 | 進 | 圓 | 重 | 二 | 米 | 郎 | 純 | 郎 | 二 |
| 郎 | | | 雅 | | | | | 吉 | | 一 | | |

十全會遊技部

恭賀新禧

明治三十一年一月元旦

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 湯 | 鈴 | 志 | 久 | 鴨 | 福 | 湯 |
| 淺 | 木 | 田 | 我 | 脚 | 見 | 目 |
| 啓 | 於 | 主 | | 光 | 常 | 隆 |
| 一 | 菟 | 稅 | 龜 | 榮 | 太 | 績 |
| | 吉 | | | 郎 | | |

謹賀新年

併祝諸君之萬福

謝平素之疎濶

金澤醫學專門學校病理教室

明治三十八年一月元旦

村上庄太
 渡 孚 貞
 小原芳雄

賀正

在江田島

鈴木寬之助

謹賀新年

石川縣警察部

關屋林之助
 越野義三郎

恭賀新年

在金澤

米村吉太郎

謹賀新禧

在金澤

岡本京太郎

賀正

在宇田津

諸角友平

謹賀新正

出征中

眞柄佐一郎

賀正

在七聯隊

佐藤潮

謹賀新年

明治三十一年一月八日

珠洲郡松波村

藤岡勝治

鹿兒島市立鹿兒島病院

平田一若

在金澤病院

八田智證

第三十六聯隊

朝倉重敏

謹賀新年

石川縣石川郡大野村

本田三郎

在金澤

島田吉三郎

謹賀新年

在金澤

高伊三郎

謹賀新年

大坂市東區京橋三丁目

明治三十八年一月八日

森岡惣太郎

第二十二回産科婦人科學講習

科目 産科手術學及婦人科診斷學

時日 三月一日ヨリ同三十一日マデ 毎日午後一時ヨリ三時マデ

資格 醫術開業免狀所有者

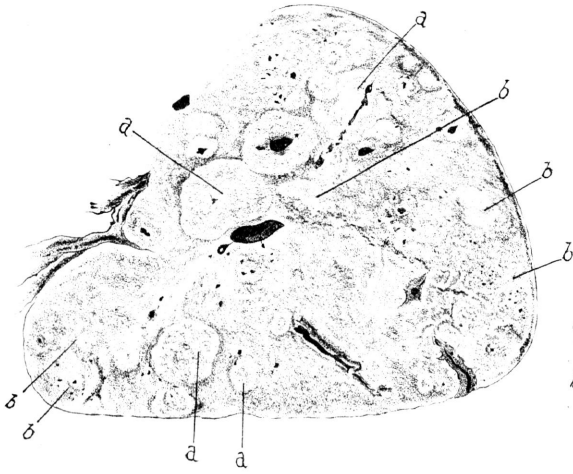
規書御望みの人は郵税二錢御送りのこと

右廣告ス

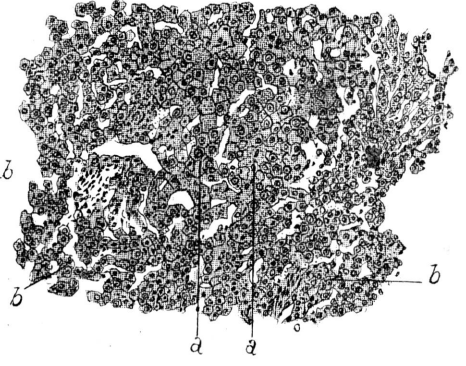
東京市日本橋區濱町三丁目七番地

産科 婦人科 楠田病院教室

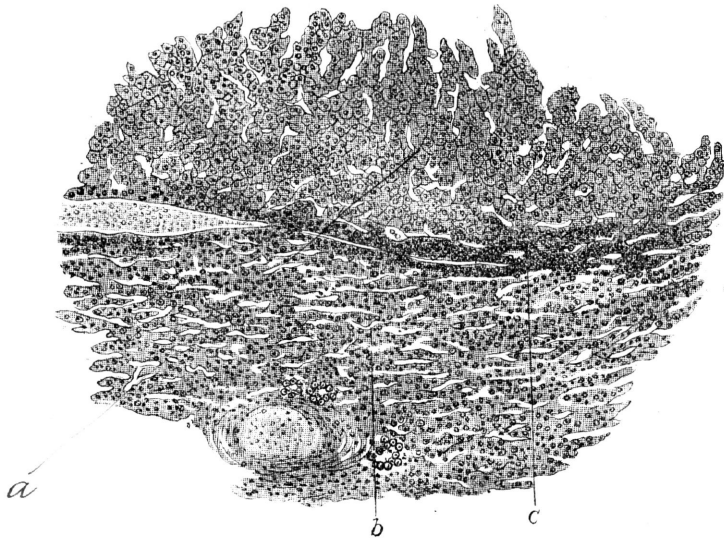
第一圖



第三圖



第二圖



雜誌

○原發性腸結核？

Ist der Primäraffect in Darm? — in Lunge?
oder in Kehlkopf? besonders in meiner Fall.

四年級學生 渡邊 彊

結核浸出道ハ何處ナリヤ Wo sind der Eintrittsgänge der Tuberculose?, 古來説ク所多シト雖モ現今人ノ信ズルモノ三ツアリ、曰ク吸入説、曰ク血道傳染説、曰ク淋滲道傳染説、果シテ然ラバ其ノ進入門戶 sog. Eingangspfortenハ之ヲ那邊ニ檢索ス可キゾ、由來多クノ唱道スル所ハ呼吸道、口腔、扁桃腺、腸管、皮膚、泌尿生殖器等ニシテ之レガ感受性ノ強弱ハ罹病頻稀ノ差異ヲ生ズルヤ言ヲ須ヒズト雖モ、諸説ノ一高一低、衰盛ヲ起スベキハ寧口進歩ニ隨伴スルニ現象タルヲ思ハ、吾人ガ其ノ一端ヲ窺ハントスル微意ノ必ズシモ蛇足ニ非サルヲ見ル。

乞フ吾人ヲシテ先ツ一般浸出道ニ就キ爾來學者ノ唱フルトコロヲ瞥見セシメ終リニ腸及ビ結核ノ關係ニ論及セシメヨ

初メ結核ノ來襲スルヤ R. Koch und Weichselbaum 二氏ノ主張セル Inhalationstheorieニ信賴シ久シク人ノ定認スル所トナレリ後 Einstein, Sänger 諸氏ガ之ヲ疑ヒ重キヲ血道及淋滲道ニ措カレタルニ對シテハ又多クヲ説カズ。Cornet 氏一度空氣傳染説ヲ稱ヘ咯痰ガ塵埃ト混シテ空中ニ浮游シ其ノ菌ノ吸入ニヨリ好ク肺結核ヲ起サシムベシト云ヒ又 Fiebig 氏ハ之ニ反シ有菌唾液小分子吸入説 Tropfeninfection ヲ唱ヒ、動物ヲ入レタル試驗室ノ一孔ヨリ肺結核患者ニ咳嗽セシムル時ハ結核菌ハ室内ノ空氣中ニ充滿スル爲メニ該動物ハ結核症ヲ起シテ斃死スルニ至ルヲ實驗セリ。然レモ二者ノ論ズル所ハ共ニ吸入ニヨリテ來ルヲ重ジタルモノニシテ永ク其聲價ヲ保持シ或ハ是ヲ唯一ノ侵入門戶ト過信スルニ至リ世ハ靡然トシテ之ニ從ヒ結核豫防モ亦此ノ基礎ノ上ニ立ツニ至リス。

然ルニ一九〇〇年 Aufrecht 氏ハ「肺癆ノ原因及局所的發端」ナル論文ヲ發表シ肺結核ハ血性傳染ニシテ菌ハ血路ニ侵入シ肺ノ血管壁ニ附着シ之ヨリ發生スベシト云ヒ又 Ribber 氏ハ吸入セラレタル結核菌ハ無害ニ肺ヲ通過シタル後氣管枝腺ニ發育ヲ遂ゲ之ヨリ血中ニ入りテ肺ニ土着ト云フ(氣管枝腺氣性傳染説)

Waldeyer 氏ハ扁桃腺輪ガ結核ノ侵襲ヲ被ムルヲ屢々ナルヲ稱道シ Stell 氏ハ之ニ就キテ研究ヲ遂ケラレ益々明白ノ事實トシテ現ハル、ニ到リ又其ノ外 Friedemann 氏ハ無事扁桃腺ヲ通過シテ此所ニ病變ヲナサズ單ニ侵入口トナシ之ヲ吸入力ノ強キニ由ルト説カレタルカ如キ或ハ伊藤祐彦ガ十三才以下ノ小兒百〇四人ニ付キテ研究セラレタル所ニヨレバ毫モ原發性ノモノヲ見サリシト云フガ如キ破格アリトスルモ Braud 氏ガ毒力少ナキ結核菌ヲ犬、家兎ノ扁桃腺内ニ注入セシニ頸腺ヲ胃シ次ニ肺尖ヲ侵シタルヲ實驗シ得タリト云フニ及ンデハ扁桃腺モ亦侵入門戸タリ又時トシテ發育地タルヲアルヲ徴知スベシ

Krebs 氏ハ腸ヲ以テ結核傳染ノ門戸トナシ菌ハ腸間膜腺ヲ介シテ肺ニ達スベシト、Nicolas, Descas 兩氏ハ之ヲ動物試験ニ徴シ菌ガ健全ナル腸ヨリ吸収セラレ無恙ニ腸間膜腺ニ至リ尙ホ進ンデ胸管ニ達スルヲ見タリ(田中祐吉氏ノ「肺結核發生ニ就キテ」中外醫事新報)斯ノ如キハ稍、學者ノ注意ヲ牽キシ所ナリト雖モ其ノ勢力微ニシテ大方ノ認ムル所トナラズシテ止ミス。然ルニ昨年九月獨逸國カツセル府ニ開カレタル萬有學及萬有醫學會ニ於テ Von Behring 氏ハ説ヲナシテ曰ク「牛或ハ人類トモ結核ハ哺乳時期ニ於ケル感染ヲ主トス故ニ呼吸器傳染ハ價アルモノニアラズ、消化器系統ガ其ノ進入門戸タル可キモノナリ」ト更ニ又人牛結核ノ異同問題ノ落着セサルニ當リ「有菌牛乳ハ好ク腸ニ結核ヲ原發セシムベシ」ト氏ノ説ハ實ニ幾多ノ難門ヲ排シ同時ニ數多ノ疑問ヲ解決セントスルモノニシテ吾人ハ之ヲ現今ノ一大問題ト云ハント欲ス之レ實ニ腸管傳染乃至血淋汜道感染説ノ依テ乘スベキ得意ノ時機ニ遭遇シタルモノニシテ Kober 氏ハ牛乳ヨリ結核

性腸侵襲ヲ受ケタル八十六例ヲ報告シ Heller 一派ノ病理學者亦原發性腸結核ノ稀ナラサルコトヲ唱道シ

Hof, Nebelhan 氏モ此ノ說ニ左袒シ或ハ辨護セラル、然

レモ Orth, Cornet 等二三ノ學者ハ之ニ反對シテ今尙ホ議

論ノ終局ヲ告ケズ、且ツ人牛結核ノ同一ナルテフ此ノ牛

乳傳染ニ對シ R. Koch 一派ノ人ハ決シテ容ル、コナカラ

シ、北里博士ハ北米聖路易萬國學藝會議ニ於テ本年九月

廿二日講演セラレタル結論ニ日本ニ於テ牛乳ヲ育兒ノ養

料トシテ殆ト全ク關係ナキニ拘ラズ原發性腸結核ハ大人

小兒共ニ稍々多數ナリト云ヒ且ツ Von Behring 氏ニ對シ

テハ日本ニ於テ結核ノ起因ト牛乳トハ全ク何等ノ關係ナ

シト斷定セラル。

若シ夫ノ Von Behring 氏ノ所說ヲシテ信ナラムルモ原

發性腸結核ハ獨リ牛乳ノ媒介ニヨリテ感染セラル、モノ

ニアラズ、古來我ガ日本ノ如キハ毫モ牛乳ヲ用キザリシ

時代ニアリテモ己ニ此ノ事アルヲ報セラレタリ、之レ誠

ニ食餌傳染說ノ起ル所以ニシテ健全ナル胃液モ亦結核菌

ヲ通過セシムベシト云フ、果セル哉近時管兩式氏ハ第一

回日本內科學會ニ於テ『結核ノ局在部位特ニ胃結核』ト題

シ演ジテ曰ク二四八屍中九例ノ胃結核アリ内五例ハ顯微

鏡的検査ヲ經タルガ一例ハ淋尿管ヲ傳ハリテ生ジ他ノ四

例ハ悉ク胃粘膜ヨリ來ル、胃結核ハ胃液ノ酸性ナル爲メ

ニ菌ヲ見ザルコトアリト云フモ時トシテ多クノ菌ヲ有スル

コトアリ云々ト之ニ對シ廣瀨佐太郎氏ハ討論シ、此五例ハ

全身内他ニ結核症アリヤト問ヒタルニ管氏ハ殆ト皆特發

性ノモノナリト答ヘラレタレバ胃粘膜ノ侵入ヲ立証シタ

ルモノト云フ可シ、況ンヤヨリ感受性ニ富ム腸壁オヤ、

原發性腸結核亦必スシモ珍トナスニ足ラザルナリ

見ヨ、瑞西ケンフ病理學教室ニ於テ廿五年間（一八七六

—一九〇一）解剖ニ附セラレタル屍ノ比較統計ヲ、全屍

六三二〇体中原發性腸結核ニシテ其ノ他ニ結核竈ナキ純

然タルモノ四〇例（〇、二%）ヲ實驗シ（當病院ニ收容患者

ニ小兒少ナシ）編者 Naha 氏ハ之ニ就キ腸原發症ノ案外

ニ僅少ナルニ驚キ、結核牛乳及肉ハ腸ニ感染セシムルコ

稀ナルカ、將タ腸ノ感受性微弱ナルニ因ルカト疑問ヲ起サレタリ、然レモ之ヲ結核性屍ノ三二、五六%ニ比スルニ決シテ少ナキニアラズ、況ンヤ腸ノミノ原發竈ヲ以テ算シタルオヤ是レ以外數所ノ結核竈ヲ有スルモノニシテ原發性腸結核ヲ數ヘザルモノ多カラン、吾人ハ他部ノ結核ト比較對照スル爲メニ其ノ一部ヲ抄録セン

全屍、 六三二〇

結核性 二〇五八 (三二、五六%)

内 進行性結核症 一八九三

潜在性結核症 一六五

外ニ 粟粒結核 一八一

骨及關節結核

(古キ肺結核ヲ有セサルモノ)

七二(三、二二%)

泌尿生殖器結核

(全 上)

四二(二、二二%)

副腎結核

二二(一、一〇%)

腦結核

七(〇、三六%)

原發性腸結核

(男 二〇
女 一三)

四三(二、二七%)

(münchener med. Wochenschrift Bd. 46 No. 21902)

更ニ見ヨ佐多博士ガ大坂醫學校ニアリ萩谷助手ヲシテ報告セシメタル統計表ヲ、

三年半間ニ於ケル屍數二百五十、内結核性ノモノ百十六、即チ結核死亡率四六、四%

内 二〇人 (一七、三%) 十八才以下

九六人 (八八、二%) 十八才以上

九〇人 (七七、六%) 原發性肺結核

一二人 (一〇、三%) 原發性腸結核

(六例 十八才以下。六例ハ十八才以上)

之ニヨリテ是ヲ見レバ日本ニ於テモ牛乳ハ小兒ノ養料トシテ殆ト全ク關係ナキニ拘ラズ大人ニモ小兒ニモ腸原發結核ハ少ナカラサルヲ示スベシ

更ニ萩谷玉江子ハ「腸結核乎、肺結核乎」ト題シ從來肺ノ

原發結核トシテ看過セラレタリシモノ、内腸ニ原發セシ

モノヲモ混算セルナルベシトノ疑ヲ以テ其ノ原發部位ヲ

定ムル丁ニ就キテ注意セラレタリ若シ夫レ結核吸入説ノ

根據ニ動搖ヲ來セリトナサバ益々之ヲ精鑿シ虚心好ク各病竈ノ變化ヲ觀ミ其ノ時期ヲ斟酌シ新舊良ク之ヲ較論シ以テ之カ確定ヲ下シタランニハ意外ノ結果ニ達スルナラント氏ハ實ニ腸原發結核ガ病理解剖上昔日ノ如ク稀有ナラサルコトヲ信ジタルニ由ルナルベシ、田中祐吉氏ハ之ニ對シテ贊意ヲ表シ自己ノ經驗ヲ述ベ是ガ診斷ヲ下スニ際シ仮令原發性腸結核ノ如キ外觀ヲ呈スルモノヲ檢スルニ就キテモ須ラク周圍ノ淋巴腺ノ病發的關係ヲ比較對照スベシトテ恰好ノ一例ヲ表示セラル

如上述ヘタル所ニヨリテ之ヲ推論スルニ由來腸結核ノ最大數ハ續發性トシテ考ヘラレタリト雖モ傳染侵入ノ門戶ガ他ニ發見セラレ吸入傳染説ガ聲價亦昔日ノ如クナラサル今日ニアリテハ蓋シ原發性腸結核モ一顧ノ價值アルモノナルコトヲ信セント欲ス、松拍推爲新、桑田變成海ヲ思ハバ又多少ノ興味ヲ感ズルナルベシ

予ハ近日施療患者ヲ擔當スルニ際シ臨床上肺腸喉頭結核診斷ヲ下シ宛然腸原發或ハ喉頭原發ヲ以テ肺續發結核ト

ナサント思ヒシモ當時予ハ結核直ニ肺ヲ連想シ先入爲主明頭腦タリシヲ以テ扨ゲテ肺原發結核ト推定セリ爾來數日ヲ出テズシテ患者衰弱ノ爲メ易糞シ、之ガ屍ヲ解クニ及ンデ益々腸病竈ノ原發ニ重キヲ置カレス。若シ一步ヲ讓リテ之ヲ腸原發トナサンカ茲ニ吾人ハ亦喉頭結核ト其ノ新舊、原發ヲ確定シ得サルノ困難ニ遭遇スベク、若シ之ヲ平易ノ意味ニ解サバ肺原發トシテ不可ナキニ似タリサレバ我レハ此ノ例ヨリ喉頭原發結核ヲ全然削去スルコト能ハズ

予ハ本例ヲ記述スルニ先チテ茲ニ之ヲ論セントス昔ハ喉頭ノ結核ヲシテ悉ク續發トナシテ原發ヲ非定セリト雖モ結核侵入門戶ノ所々ニ發見セラル、ヤ茲ニ喉頭ノ原發症例多ク現ハレ今ヤ皆ナ其ノ說ニ歸着セリ予ガ二三前年ノ文籍ニ於テ見タル所ヲ列記スレバ明治卅五年四月三日東京醫學會ノ宿題報告トシテ金杉岡田兩博士ノ告ケラレタルハ三四六例中原發八例(男七女一)マツセ氏二三八例中一五例、東京病院佐藤氏二三九例中二例、宮島氏ハ一七

七例中二例ノ原發症ヲ報セラレ昨年ノエフィルド氏ハ原發結核性腫腸ノ一例ニ於テ全治セシメタルヲ報シタリ、Heryng ガ "Heilbarkeit der Kehlkopfentzündung," ト題シ十二例ノ全治セルヲ報セシハ恐ラク原發結核ナリシナラン

然レハ喉頭結核ヲ以テ死ヲ招ク例少ナク遂ニハ肺ニ續發シテ之ガ爲メニ死ノ轉機ヲ取ルモノアレバ假令原發症タリトナスモ丁重ナル注意ヲ以テ之ヲ決セサルベカラス然ラサレバ唯ダ疑ヒヲ捕シテ止ムベキノミ故ニ余ハ此例ノ喉頭ノ原發症ニツキテハ暫ク之ヲ問ハズ、主トシテ腸ニ重キヲ置キ將サニ原發性?ナルヲ認メントス、然ラバ其ノ治療的價值ハ如何之レ吾人が第一ニ問ハントスル問題ナリ原發ト非原發トハ其ノ價值幾何ゾ之レマタ次ニ聞カントスル所ナリ

結核ノ治療ハ凡テ幼稚ノ時代ニアリ、コホ氏ノつべるくりんハアリトモ血清療法アリトモ其ノ効ヤ疑ハシ、特ニ腸結核ニアリテハ外科學ノ範圍ニアル一二ノモノ——腸

管内一ヶ乃至數ヶノ潰瘍ヲ生ジ、治シテ癍痕ヲ爲セルモ或ハ回盲部ニ來ル結核性回盲腫瘤等——ヲ除キテハ是ニ施スノ術少ナク姑息的手段ニヨルニ非サレバ則チ對症療法アルノミ、吾人が嚴密ナル意味ニ於テ原發性腸結核ガ未ダ他ノ經發症ヲ有セザルニ先チ確實ナル診斷ヲ下シ得バ手術ノ効ニヨリ或ハ内科的治療ニヨリテ全治ノ幸運ニ到ラシムベシト雖モ、事實ハ之ニ反シテ多クハ他ニ結核症ヲ併有シ、尙ホ最多數ハ他ヨリ續發性トシテ現ハル、モノナレバ之ガ病根ヲ斷チテ這般ノ良効ヲ奏セシムルヲ能ハズ、況ンヤ總テ此等腸結核ハ早期診斷ノ困難ナルオヤ、之レ本症ノ凶ナル所以ニシテ臨床的原發、續發ノ區別モ(不幸!)其ノ價值少ナク爾來結核療法ノ完成セル曉ニ於テ初メテ充分ノ價值ヲ瞻望スベシ、果シ斯ノ如クンバ夫レ原發タルト續發タルトハ只ダ病理學的興味ヲ有スルニ止ムベキ歟然ラズンバ篤學者ノ講究問題トシテ未ダ實地醫家ノ頭腦ニ刻ムヲ要セザルモノナラン歟

* * * * *

症 例

患者 金澤市石坂角場

學 生 大 井 泰 雄

行年 二十二

病牀記事

一、既往症

A. 血族及遺傳ノ關係。父方ノ祖父ハ數年前不名ノ症ヲ以テ易簧シ祖母モ亦數年前ニ老死ス、母方ノ祖父母ハ病死シタレモ今其病名ヲ記憶セズ只ダ肺癆ノ遺傳ナシト云フノミ。父ハ十一年前肺患ノ犯ス處トナリ遠逝シ母モ昨年同病ヲ患ヒテ鬼籍ニ入ル、同胞九人(女性三人 男性六人)アリ患者ハ其ノ第二子ニシテ兄ハ先年腎臟病ニテ夭死シ姉ハ肺癆ノ爲メニ斃ル妹一人健存シ嫁シテ他ニアリト云フ其ノ他一二才ニシテ悉ク夭逝セリ

B. 既往ノ疾患。麻疹、痘瘡ニカ、リタルコトナク種痘數回善感セリト云フ幼時又腺病ヲ知ラズ、六年前ニ腸窒扶斯ヲ患ヒ數ヶ月間病床ニ起臥シテ衰弱ニ陥リタルコ

アリ更ニ往年脚氣症ニカ、レリト云フ、昨年(卅六年)十一月痔瘻(?)ヲ病ミ醫治ヲ受ケ本年(卅七年)三月全癒スト。其ノ他肺、肋膜ノ疾病ヲ患ヒタルコトナク又咯血、血痰ヲ見タルコトナシ

C. 本病々歴、二三年前ヨリ胃腸ノ障害アリ食慾常ニ進マズ、本年四月ニ至リ氣管枝加答兒ニ罹リ同時ニ聲音嘶啞ヲ來シ、咳嗽アリ咯痰ナシ、患者時ニ宗教學校ニ入り東京ニアリ醫治ヲ乞ヒ同六月マデ滯留セシガ稍々輕快セルヲ以テ歸省シ後チ寺院ニアリテ靜養スル所アリタレモ食氣益々減退、嚔下困難ヲ訴ヘ下痢便一日數回ニ及ブ又地ヲ海濱ニ轉ジテ保養ヲ行ヘタレモ其効ナク全身倦怠、衰弱愈々加ハリ十月七日本院ニ來リ治ヲ乞ヒ治療院ニ収容スルコトヲ許サル入院後二日ニ病勢増劇シ食慾殆ト欠損シ且下痢ハ前日ニ比シテ回數繁クナリ十月廿九日ヨリハ米飯ノ食ニ耐ヘズ牛乳四合ヲ飲用スルノミ同時ニ脱力加ハリ就床ノマ、立ツコト能ハズ盜汗ハ本年五月頃ヨリ先月頃マデ之アリタレモ今ヤナシ

呼吸促進ナク胸部ノ疼痛ナシ

初メヨリ胃腸加答兒ヲ患ヒタリト雖モ嘔吐ナク蛔條蟯

虫ヲ見タルコトナシ只ダ一日數回ノ下痢便ヲ以テ主訴ト

ナス 余一日傍ニアリ問フニ食氣ノ减退シタル理由ヲ以テ患者曰ク之レ半ハ嘔下時ノ喉頭部疼痛ト一半ハ腸胃ノ障害ノ爲メナリト

時ニ頭痛眩暈ヲ發スルコトアレヒ精神ハ終始依然トシテ

乱レズ

D. 性癖、酒ハ獨酌壹合、對酌五合、菓ヲ好マズ、甘味

ヲ嗜ム

二、現在症 (十一月五日)

A. 視診上、

a 一般狀態、体格中等營養不良、顔面貧血ヲ呈シ(頬

ニ消耗性潮紅ヲ見ズ)、眼瞼結膜特ニ然リ口腔粘膜ハ

蒼白、舌ハ鮮紅ニシテ苔ナシ、皮膚ハ一般ニ乾燥甚

タシ、皮下脂肪ハ全然消失ス、頸部ハ細長也

b 胸廓、患者常ニ仰臥ノ位置ヲ取リテ動カス、肋骨、

胸骨ハ共ニ隆起シ肋間爲メニ陷沒スルコト著明ナリ、

心窩ノ角度強キ銳角ヲ呈ス、起シテ背部ヲ見ルニ一

般浮腫狀ヲ呈シ、翼狀肩胛ヲ呈ス一見麻痺胸一深

呼吸ヲ營ナマシムルニ補充實ノ移動甚ダ少ナシ

C 腹部、胃部ハ稍、陷沒シテ蠕動スルヲ見ズ下腹部

ハ扁平ニシテ強ク緊張シ何等ノ隆起スルモノナシ

B. 觸診上、

a 頸胸部、頸腺稍、腫張、右前腋窩線ノIII肋間ニ限

局性壓痛部位アリ心尖搏動ハ左線V肋間ニアリ、喉

頭結節ノ部一般ニ過敏ナリキ

背部ニ輕度ノ蕁瘡アリ

b 腹部、肝脾ヲ觸レズ、胃部ニ電鳴アリ壓痛及自發

痛ナシ、下腹部ニアリテハ過敏ナルノ外壓痛アリ好

ク觸診スルニ腸間膜腺ノ磊塊ヲ感觸スベシ

C. 打診上、

a 肺、前面、上界、左鎖骨上窩一指橫徑上方、右鎖

骨上窩一指半橫徑上方、下界ハ之ヲ定ムルコト能ハズ

鎖骨直打法ニ鼓音、左右I肋間乃至III肋間ニ至ル間

ハ共ニ鼓性ヲ帶ビ右ハ特ニSchachteltonヲ呈シウヰン

トリヒ氏打響變換アルヲ感ジヌ

背面上界、VII頸堆体ニ相當ス、下界ハ肩胛下隅ヨリ

四指横徑下方ニアリ但シ此ノ部后ニ至リテ耗濁音ト

變ジタリ其ノ他打診音ニ變常ナシ

b 心臟、肝臟ニ變化ナシ

c 胃、一般ニ濁音(當時)ヲ呈シ下界ハ結腸ノ音ト判

然定ムルヲ能ハズ、振水音ナク半月狀部ニ變化ナシ

d 下腹部、輕濁音ヲ呈シ滲出物ノ存在ヲ疑フノミ然

レモ体位ノ變換ニ由リテ何等移動及變化アルヲナシ

D. 聽診上、肺胞呼吸皆一般幽微、特ニ前面右側V肋骨

乳部ニ於テ全ク消失セル小部分アリ、鎖骨上窩ハ粗裂

ナリ、右前III肋間乳腺ノ外方ニ於テ氣管枝呼吸音ヲ聽

取シ左側ニモII III肋間ニテ之ヲキク

背部ハ上葉ノ肩胛腺ニ於テ兩側トモ氣管枝音アリ他ハ

肺胞呼吸音ノ只ダ微ナルノミ、別ニ之以外異常音ヲ聽

カズ

肺動脈音ハ亢進ス特ニII音ニ於テ然リ他ニ變常ナシ腹

部ヲ聽診スレモ麻擦音ヲキカズ

E. 聲音振顫、右ハ左ニ比シテ異常ニ著明ナリ左ハ最モ

低クシテ幽カナリ、背部特ニ下部ニアリテハ音聲低キ

爲メニ結果ヲ得ザリキ

F. 胸圍乳腺ニ於テ之ヲ測ルニ常盈七十七cm差、一、五cm

G. 呼吸數、二十二、三、(一分時)

H. 熱型、弛張或ハ稽留スル三九―四〇、ノ消耗熱アリ

I. 脈搏數、十一月五日八十四至、漸次速脈ヲ來シ百廿

至以上ニ至ル

J. 咯痰 a 性狀、粘稠ニシテ縷ヲ牽キ一日量卅瓦位色

ハ帶黃色ニシテ泡沫少ナク臭氣ナシ又錢貨狀、球狀ノ

形ヲ具フルヲナク之ヲ靜置スルニ三層ヲナサズ、b 顯

微鏡的検査、第一回ノ検査陰性ニ終リタレモ次回ノ成

蹟ハ頗ル陽性ニ現ハレ一視野中多キハ二三十ヶヲ數フ

ル所アリタリ c 彈力纖維ハ微々之ヲ見タリ

K. 尿、尿利少ナク一日三乃至四〇〇、〇ヲ出テズ

a 性狀、帶褐黃色、時トシテ鮮紅色ヲ帶ビ眞ニ血色

素尿ヲ疑ハシムルコアリ、比重、一〇三〇—一〇三
四、反應、強酸性

b 化學的検査、糖ノ痕跡アリ、蛋白ナク血色素ナシ
あちエどんノ反應ナシ

c 沈渣、顆粒、硝子圓柱、腎上皮等アリ、結晶ノ類
ヲ見ズ

d 腎結核ヲ疑ヒタルヲ以テ數回此ノ沈渣ヨリ結核菌
ヲ得ントセシモ皆ナ陰性ニ終リキ、

l. 糞便、患者先キニ下痢、便秘ヲ患ヒタリト雖モ一ケ
月以前ヨリハ下痢ノミニナリ一日三四—六七回ニ至ル

a 性状、液性濃厚ノ軟便ニシテ血斑及血点ヲ含有シ
其色暗赤色ナリ其他粘液ヲ含ミ僅カニ固形未消化物

アリ
b 顯微鏡的検査、結核菌及虫卵ナシ只ダ脂肪、粘液
血球及マクテシアノ結晶ヲ見ルノミ

喉頭ノ検査、患者脱力シテ牀ヲ離ル、コ能ハズ只
ダ仰臥シテ動カズ、サレバ之ガ検査モ施スニ由ナ

ク其診斷モ素ヨリ自覺症ト他ノ結核症ヨリ推定シ
タルノミ

三、診斷

肺結核、腸結核、喉頭結核、鬱血腎？

之レ其ノ諸症狀ヲ綜合シテ尙ホ疑ナキニ檢痰亦陽性ナル
ニヨリテ明ナリ

肺結核ハ第一期第二期トヲ合併ス、腸結核ハ下痢及下血
ニシテ潰瘍アルコヲ証シ、喉頭結核ニ至リテハ未ダ一回

モ検査シタルコトヲ斷腹及嚥下困難ノ症狀ト肺病竈トヲ
考ヘ全ク續發性結核トナス

四、經過及豫後

入院后二日ニシテ病勢頓ニ進ミ全身ノ營養著シク不良
何幾モナクシテ脱力大ニ加ハリ廿日余ニシテ今ハ床ヲ離

ル、コノ力ナク熱ハ依然トシテ日哺型ヲ呈シ加之腸喉頭
ノ併發症ハ經過ヲシテ益々早カラシメ豫後ヲシテ愈不良

ナラシメタルナリ

五、治療法 (腸結核ニ對シ)

攝生ニ注意シ榮養ヲ良クスベシ則チ滋養ニ富ミ消化シ易ク而シテ腸管ヲ刺戟セザルモノヲ與フ例之ハ粥、おも湯、牛乳、鶏卵、肉汁ノ如シ苟クモ腸ノ蠕動機ヲ亢進セシムルモノハ嚴禁セザルベカラズ、下腹ノ疼痛及ビ患者ヲ苦シムベキ下痢ニ對シテハ麻酔劑、收斂劑ヲ用ユ即チ阿片、單寧、明礬、醋酸鉛、硝酸銀、たんニンゲン、たんなるびん、ノ如キヲ處ス可シ

本患者ノ如キハ牛乳一日二合ヲ飲ムノ外水藥モ飲ミ得サルニ至リ口ヨリスル食物ハ榮養ヲ計ルコト能ハズ
消耗熱ニハびらみどん、あすぴりんヲ用ユ効著シ

患者臨終ノ狀態、死セントスル前日、午前十時ヨリ患者ヲ検査シタルガ當時未ダ精神ノ異狀ナク尋問亦要領ヲ得タリ、然ルニ着病婦ノ言フガ如クンバ此ノ日午後ヨリ精神亢奮シ轉々牀上ニ苦吟シ、悲鳴ヲ以テ救濟ヲ索メ、或ハ既住ノ恩ヲ謝シ「今死セントス」ト叫ビ平常溫順ナル風習今全ク一變シテ終夜眠ラズ、翌朝ニ至リ患者益々衰弱シ彼ガ遺言ヲ書カントシテ取りタル筆モ運ブノ力ナク正

ニ燈火ノ消滅スルガ如ク、死ノ運命ハ彼ヲ奪ツテ去リヌ
(十一月十五日記)

剖檢錄 Das Sectionsprotokoll

明治卅七年十一月十五日午前十時半死亡

全月十六日午前十時ヨリ本校構内病理解剖室ニ於テ村上教授執刀剖檢ヲ行フ、今其ノ記録ヲ乞フテ左ニ所見ヲ述ヘン

第壹 外景検査

- 一、一男屍、体格中等、營養不良、体重七十五磅
- 二、全身皮膚一般ニ蒼白菲薄、腹部ハ稍々青色ヲ呈ス、屍斑ハ背部ニ於テ僅ニ見認ム
- 三、死後強直ハ下顎關節ニ存セリ
- 四、頭部ニ變狀ナク、顔面ニ於テ眼ハ左右共ニ半開ノ狀ニアリ、瞳孔ハ中等度ノ散大ヲ呈シ、鼻、口、耳、耳腔ニ異常ナシ、頸部、胸部、腹部、外陰部、背部等スベテ異常トシテ記スベキモノナシ、上肢ニモ異狀ナク下肢ニテ足背ニ僅微ノ浮腫アリ

第貳 内景検査

甲、胸腹腔開檢

五、胸腹軟部ヲ解見スルニ皮下脂肪層、筋層、共ニ甚ダ

薄ク、筋肉ハ赤褐色ヲ呈セリ、腹腔内ニハ帶赤黄色ノ

僅カニ溷濁セル液五〇〇瓦ヲ含有ス、腹膜ハ滑澤ニシ

テ所々ニ血管網ノ充盈スルヲ見ル。腹腔内臓器ノ位置

ニ變常ナシ

腸ノ上行面ハ一般ニ帶黄灰白色ニシテ、所々ニ結核ノ

病竈ヲ散見ス、臓器ノ癒着ナシ

横隔膜ノ高サ、左ハ第五肋骨、右ハ第四肋間ノ高位ニ

アリ

其一、胸腔臓器

六、式ノ如ク胸腔ヲ開檢スルニ左^{〇〇〇〇}右^{〇〇〇〇}胸膜ハ悉ク癒着ヲ呈

シ。右胸腔内ニハ稀薄ノ紅色液三〇〇立方仙迷ヲ含有シ

肋膜ニ癒着ナシ

七、心囊内ニハ僅カニ赤色ヲ帶ブル黄色ノ稀薄液凡ソ二

〇立方仙迷ヲ含有シ内面淡紅滑澤ナリ

八、心臟ノ大サ本屍ノ手拳大ヨリ稍大ニシテ左右共ニ軟

ナリ冠狀靜脈ニハヤ、鬱血ヲ呈セリ

右心内ニハ軟凝血ヲ混ズル血液多量ヲ含有シ房室間孔

ニハ易ク二指ヲ通スベシ

左心内ニモ亦流動血多量ヲ含有シ房室間孔ニハ二指ヲ

通ズ

心臟ヲ摘出シテ大動脈、肺動脈ニ水ニ注グニ各半月狀

瓣ハヨリ閉鎖ス

右心内膜ハ滑澤ニシテ辨膜裝置ニ變化ナシ

左心内膜モ亦滑澤、辨膜裝置ニ變常ナク乳嘴筋及ピ肉

柱少シク肥大ス

筋肉ノ色滑、一般ニ淡褐色ニシテ其ノ質軟ナリ

厚サ、左、一、〇cm 重量 二二二、〇瓦
右、〇、六cm

九、左肺ヲ肋骨肋膜ト共ニ摘出シテ檢スルニ著シク緊滿

ス、断面ハ血液及水分ニ富ミ、上下葉共ニ粟粒大灰白

色ノ結節數多ヲ存ス、下葉ノ上方ニハ鳩卵大ノ空洞一

個存在セリ

右肺モ亦著シク膨張シ表面滑澤、葉間ニ輕度ノ癒着アリ按壓スルニ所々硬結竈ヲ觸ル、上葉后部ノ一部著シク癥痕様ヲ呈シテ陷凹セリ、氣管枝ヨリハ泡沫多量ヲ出ス、斷面一般ニ血液及水分ニ富ミ、上葉ノ癥痕様部ノ斷面ハ蠶豆大ノ空洞ヲ呈シ其ノ内ニ帶黃色ノ乾酪様物ヲ含有ス

其二、腹腔臟器

十、脾臟ノ大サ、一二、〇―八、〇―三、〇cm 重量一五二、〇瓦

表面滑澤、斷面暗赤色ヲ呈シ血量少シ、脾髓及脾材ノ別明カナリ

十一、左腎、大サ、一〇、〇―四、五―三、〇cm 質稍々軟ナリ、莢膜ハ容易ク剝離シ得ベシ、斷面ニ於テハ血量中等、皮質、髓質ノ別稍々不明、僅カニ溷濁ヲ呈セリ、重量、一三四、〇瓦

右腎、大サ九、五―四、五―三、〇cm 莢膜剝離シ易ク、斷面性狀亦左ニ於ケルガ如シ

重量一三四、〇瓦

十二、膀胱内ニハ殆ンド内容ナク内面、淡紅滑澤ナリ
十三、十二指腸内ニハ汚穢帶黃灰白色、粘稠ノ液多量ヲ含有ス、粘膜ハ著明ノ充血ヲ呈セリ、下行部ノ横側ニシテ送胆管十二指腸開口部ノ約三、〇cm 上方ニ於テ豌豆大ノ潰瘍一個存在ス、輸胆管ハ良ク開通セリ而シテ胆嚢ヲ壓迫スルニ「デストマ」虫數條ヲ出ス

十四、胃中ニハ汚穢帶黃灰白色ノ粘稠液凡ツ一〇〇、〇瓦ヲ含有ス、内面ハ一般ニ帶黃灰白色ニシテ所々著シク充血ヲ呈スルヲ見ル

十五、肝臟、大サ、二六、〇―一二、〇―五、五cm 重量一五一〇、〇瓦

胆嚢管ヤ、擴張ヲ呈ス、胆嚢ニハ黃褐色ノ粘稠液多量ヲ含有シ其ノ中ニハ「ヂストマ」虫數條ヲ有ス内面ニハ變狀ナシ、輸胆管周圍ノ淋瀝腺ハ腫大ヲ呈ス肝臟ノ表面ハ滑澤黃褐色ヲ呈ス、斷面ノ血量ハ中等度ニシテ胆管著シク擴張シ、壁肥厚ス、塵迫スレバ胆管ノ斷端ヨ

リ多數ノ「ヂストマ」虫ヲ排スベシ

十六、小腸腸間膜ハ著シク腫大ス。小腸及大腸ノ全部ニ涉リ無數ノ大小種々ノ潰瘍ヲ存ス、其ノ性質ハ綠ヤ、隆起シ面ニハ汚穢帶褐黃色ノ壞疽物ヲ附着ス、其ノ形ハ多クハ不正ニシテ長ク腸管ノ縱經ニアルモノアリ又横經ニ一致シテ生セルモノアリ

潰瘍中尤モ廣クシテ尤モ陳舊ナルモノハ回腸最下ノホーヒシ氏辨膜ノ近傍ニアリテ縱經一三、〇cm、横經八、次キテ結腸ノ起始ニモ同ジク大潰瘍長經九、〇横經六、二cmノモノアリ其他一圓銀貨大ナルモノ二錢銅貨大ナルモノ一錢貨大、五厘貨大ナルモノ蠶豆大ナルモノ總數百三十一ヶヲ數フ内八十四ヶハ小腸ニ四十六ヶハ大腸ニ一ヶハ十二指腸ニアリ虫様突起、粟粒結核數多ヲ存シミナ乾酪變性ニ陥ル、

後腹腸間膜腺腫大ス

腸管内蛔虫二條アリ

乙、頸部臟器

十七、舌ニハ記スベキノ變常ナシ

十八、兩側扁桃腺ニハ各豌豆大ノ陷凹シタル帶黃色ノ病竈アリ、其ノ面乾酪物ヲ附シ潰瘍ヲ呈セリ

十九、會厭軟骨ハ其邊緣著シク欠損ヲ呈シ不正形ヲナス其ノ下面ニ於テ尖端ヨリ下方ニ長サ約二、〇cm幅〇、五cm許リノ白色ノ腐蝕セル部アリ、右假聲帶及眞聲帶ハ著シク腫起ヲ呈シ、喉頭粘膜炎一般ニ帶黃色ノ粘液ヲ附着シ其ノ面帶赤色ナリ

會厭軟骨ノ左ニ接シ咽頭ノ左側壁ニハ二錢銅貨大ノ邊緣不正、ヤ、隆起シ其ノ面赤色ヲ呈セル潰瘍一ヶ存ス二十、氣管内面ハ粘液ヲ附着シ一般ニ赤色ヲ呈セリ

第參 顯微鏡検査

所置。一〇%フォルマリン溶液ニテ固定シ増強アルコホールニテ硬化シテコロイデンニテ einbetten シ、ヘエマトキシリン及エオザン重複染色ヲ施シテ之ヲ檢スルニ

一、腸、(小腸最上部ニ於テ小潰瘍及ヒ其ノ周圍)

粘膜層及粘膜下層ニ於テハ壞死シ圓形細胞ノ浸潤アリ

而シテ上皮細胞ハ脱落セリ

潰瘍ノ部分ハ濾胞ハ腫起シ筋層ハ内外共ニ細胞浸潤ヲ蒙リ特ニ外層ニ於テ甚タシキヲ見ル、漿液膜モ細胞浸潤シ欠損部アリ肥厚部アリ、筋層及ヒ漿液膜ニハ數ケノ巨態細胞ヲ含有ス

他ノ切片ニ於テ内筋層ノ非薄トナリ外筋層ノ全ク破壊セラレタルモノアリ或ハ外層存シテ内層ヲ欠クモノアリ而シテ常ニ細胞ノ浸潤ヲ伴フ

二、會厭軟骨。上皮細胞ノ剝離、高度ノ細胞浸潤、血管充盈、粘液腺ノ増殖、軟骨細胞ノ染色不平等ヲ見ル

三、口蓋扁桃腺(両側)。中等度ノ細胞浸潤、多數ノ潰瘍形成、アリ

四、腎臓、両側トモ血管ノ擴張、細胞ノ浸潤ヲ散見スルノミニシテ結核ノ病竈ヲ認めズ、其他實質ニ萎縮状態ヲ見ル一局部アルノミ

其他肉眼的ニ証シ得タル結核竈ニ就キテハ Präparierenセザリキ

第四 解剖的診斷

兩側肺結核。左側癒着性肋膜炎。腸結核。胃加多兒。グライト氏病。蛔虫症

第五 屍 因

衰弱窒息

結 論

我嘗テ結核侵入門戸ニツキ先輩諸氏カ唱道セラレタル事蹟ノ一部ヲ管見シ、過去ノ歴史ト近時ノ趨勢トヲ見、議論稍々明晰ノ域ニ進ミ根蒂亦歸着スル所アルニ似タリト雖也而カモ統計家ガ議論ノ一致ヲ欠キ初學者ヲシテ往々疑團ノ内ニ迷ハシムモノアルニ際シ偶々本症例ニ接シ大人ニ於ケル原發性腸結核モ昔日ノ如ク稀有ナルモノニアラズト云フ立脚地ヨリ予ハ之ニ就キ少シノ興味ヲ感じ結核侵入門戸トシテノ腸ヲ究メント、薄學非方覺東ナクモ迨リ入ル學界ノ門戸、齋ス所ハンモ幾何ゾヤ

一、臨牀上、腸管障礙ノ肺症狀ニ前驅シテ起リ其ノ度亦劇甚ナリ。但シ病ノ末期ニ至リ急速ノ經過ヲ取り病勢ノ進行ヲ來サシメタルハ混合感染ノ之ニ加擔セルニヨルモノナリト雖モ患者ヲシテ脱力セシメ甚タシキ榮養障害ヲ致サシメタル至因ハ多ク腸ノ官能障害ニアリ

二、聲音嘶嘎ハ比較的早期ニ發現シ、咳嗽咯痰ノ見サルニ先チテ存シ同時ニ嚥下ノ困難ニ惱ミ患者ヲシテ食物攝取ノ念ヲ斷タシメタルヲ

三、本症ノ初發ト認ムベキモノハ卅七年四月ニシテ無キ數ニ入リシハ同年十一月中旬、其ノ經過約八ヶ月ニシテ比較的急速ノ經過ヲ取リタルモノト云フベシ

四、病理解剖學上、腸結核病竈ト肺ノ病竈ノ時期ヲ推定スルニ前者ハ後者ニ先ンジテ胃サレタルモノナラン

五、腸、肺兩竈漫延ノ程度ヲ對照スルニ腸ハ肺ヨリモ廣大ナル範圍ニアリ且ツ經久ナルヲ見ル

六、喉頭ニ於テ會厭軟骨一部分欠損シ結核ノ襲來ヲ受ケタルハ病初期ニシテ亦肺病變ト新舊ヲ爭フノ價值アリ

七、肝腔ハ之ヲ偶然ノ合併症ト認メテ敢テ問ハズ由是觀之、本例ハ少ナクトモ原發性腸結核タルヲ非定スルヲ能ハズ然レモ肺ヲ以テ原發地トナスヲ能ハズ更ニ思フ喉頭原發症ハ之ヲ否認ス可シト雖モ此場合ニアリテハ腸及肺ト相對照シテ讓サルベシト

蓋シ輕卒ナル判定ニ由リ或ハ然ラズトモ腸ニ重キヲ置キ感受性ヲ信ズル人將又牛乳傳染ヲ定認スルモノニアリテハ必スヤ之ヲ腸ノ原發ト言ハン、サレド我ニ之ノ決斷的智力ト經驗トヲ有セス、本例ノ價值ヲ刪減スベキハ固ヨリ其ノ所ナリト雖モ吾人尙ホ之ヲ疑團ノ内ニ容レ敢テ賢明ナル諸彦ノ教示ヲ仰ト云爾

擱筆スルニ臨ミ我ガ病理學教室ノ諸先生ガ指導ノ勞ヲ取ラレタルハ予ノ感謝措ク能ハザル所、謹ンデ厚謝ノ意ヲ表ス (完)

卅七年十二月十日



漫 錄

○訣別の記 雨 城

立ちわかれ行く雲は孰らの嶺にやかへららん、たゞうす紫にうかべる
秀峯に向ひてこし方の現を繰りかへす夢こそなけれ、刷毛もてあでし
あかれの空にほのめく夕づゝの影の薄き光を仰ぎ見ては、しかずかに
泪あふるゝ夕まぐれに候ふかな。いと長しと思ひし夏季の休みもゆ
めの中に過ぎ去りて、あすはまた戀しきふる郷、淀にはあらぬ河瀬の里
を立ち去り、再び學び舎に入るべき運命と相なり申し候ふ。雨橋子
いつもみ手づからの繪はがきたまへる君、忘れ給はじ葉書はいにし日
も御目にかけてたり―は北越の空あつかしとな仰せらるれど、われは情
ありてか情なくてか、懐かしくも戀しくもこれなく候ふ。その理はみ
づづからも存せず、強ひて御たづね下さるまじう候へ。
拙き筆ながら、わが庭に咲ける萩の白露、これを硯の海に黒そめて別
れを惜しみ給ふ君にかくはまいらせ候ふ、可祝。

「我れの君を招きしは、物言はんことのあるあればなり」
「君よ、物や思ふと我れの問ふまで、顔の色を變へ玉ふな、
話すことも話すを得ざれば」
「やよ君、我れ物言はむ、君よ怒り玉ふな」怒り玉はずと
な、喜ばしき哉」「君よ決して恨みなせそ」、恨み玉はず
とな、嬉しき哉。

「されば言はん、我れはまた明るる目を以て、他郷の空に
道はんとするなり」

「君よ、我れは親しき君と別れんは、いとつらきわざなれ
ど、われの目的とげずして如何でこの世にあるを得む、
さればつらけれど己を得ざることなれば」

「君よ、泣き玉ふな、恨み玉ふな、さては怒り玉ふな、君
は恨まじ、怒らずと言ひ玉ひし語、今何處へ失ひ玉ひし
や」

「君よ、君の言の葉の當れるを知れり、我れは告ぐべく思
ひしかど、話すべき好期なれば、思ひながらも遂話さ
りき、君よ悟り玉へ、決して我れの薄情なるにあらず
世の無情にあることを！」

「君よ、われの長らくの厚意を謝す、と共に將來の親交を
望む」否共に楽しく世を送らむを願ふ。

「君見ずや、鎌の如き三日の月、西山に沈まんとす、今宵
己に更けたり、明日の準備未だ整はざれば、別れむ、君
よ御身を大切にいと玉ひてよ、さらば君、されば君、
我れは今宵君と……別れなむ」

「止めくるゝ君の心根、有りがたし否察するに苦しむ、君
よわれをして、希望の樂園に達し、名譽の美花を手折ら
しめ、後共に樂まんと契りしにあらすや」
「なに君は悲しみの余り、歌詠みしとな」

日ごとあへど猶したはるゝ君としも

別れし後はいかにあるべき

「君が美はしき顔より否、美はしき心根より詠み出し玉
ひし歌、常ならば目出度き歌よ、美はしき歌よと愛誦せ
んものを、悲しみの余りに出しものなれば、聞きし我さ
へ悲しみに得たへず、さはいへ我れは堂々たる男子、如
何て悲しまむ、集散離合は世の常なれば、唯未來を樂し
まん、われも拙き歌詠みぬ

しばし別れ錦のころも着し上に

君と樂しく世をば送らむ

「君よ、我が心全く解しくれしと、我れは喜ばし、我れ
は喜ぶ、われは嬉れし、さらば君……今宵別れん、今
別れん、こゝにて別れん、君よ忘れ玉ふな、こゝは産土
の社頭なることを……」
君は、はなむけとして

『御身を大切にしてよ』

この語を賜ふと、我れは肝に銘じて忘しるまじ、君御
心安しう思召せ」

「我れは別れに望むで、手づから堀り來りし『吳竹二株』
を君に與へむ、君よ手づから庭面に植む玉いて朝夕眺め
てよ、其、他の草木と同一にあらざる点を」
さらば君……さらば君……一度振り向けとか……

さらば君！ いちぢらば！！

○破調集

雨 橋

(一) 欄によりて

三河の陸ちつくるところ
君は「伊良湖」のはま館
尾張のみなみ海に果つる
吾れ「師崎」のたび枕。

あだかて
温き手を伸べしごと
かたみに對ふ國の端
結はど消えむ思情も
「衣が浦」の狭き世や
篠島、日間賀、佐久のしま
すだれ捲きあげ夕暮の
雲うつくしき欄干に
薄命ころは歎かるれ。
あゝ今花に眠る身の

過世のほどを謝せよ君
さらすばなどか寂しさに
慰籍の節の聞へざる。

(二) 短冊にかきて

七夕姫のれもひより
待ちにし天津星合の
空を仰ぎて聲あげて
振りの袂を掬ふ子や。

そゝろ歩きの衣白う
人の世今宵美くしき
蚊遣にむせぶ夕顔の
灰かに見へぬ賤が宿。
夕風れちて笹の葉の
囁語く如き聲すなり
歡會たえぬ天上の
帳をいつか掲げ得む。

(三) 迷ひありて

悲しきやまと詩人の
月に理想を吾れもまた
梧葉ちる窓に描きつゝ
巻の涙をかぞへけり。

噫！書よみて愁得て
かくて執着のわが心
縁かそれも羽破れて
地藏にすがる秋の蝶。

友人みたり草の戸の
雨つれゝの灯火に
眉を騰つゝ『君も見よ
劍ありての世ならずや
神韻筆にのぶるとも
響はあらし五大洲』

微笑を含みつ『君よさけ
こがねありての世ならずや
感興むねに閃くも
飢を救はむ術予なき』

『感はぢらむと吾が友よ

科學ありての世ならずや

掌ひろし億方の

時間も空間も包むべく』

三つの萬能三つの理義

吾れの願ひの小ければ

劍は君に、君に黃金

幾春あさの末をころ。

さなり、現實の吾れ冷えて

永遠の榮に入らむとさ

七色燃ゆる虹の歌

夕日しばしの誇りをも。



會報

○叙任及辭令

任陸軍三等軍醫 (十一月三十日)

任陸軍三等軍醫正 陸軍一等軍醫正七位

任陸軍一等軍醫 陸軍二等軍醫從七位

任陸軍一等軍醫 同

任陸軍二等軍醫 陸軍三等軍醫正八位

任陸軍二等軍醫 同

任陸軍二等軍醫 同

任陸軍二等軍醫 陸軍三等藥劑官正八位

任陸軍二等藥劑官 (以上十二月十日内閣)

依願免職務 (十一月日) 金澤病院醫員

全 (十一月二十五日) 全

全 (十一月二十七日) 全

全 (十一月二十九日) 全

金澤病院醫員ヲ命ス (婦人科産科)

月俸金拾八圓給與 (十二月五日)

井原 悟

岩田 一

橋本 監次郎

國分 金城

安村 順吉

清水 秀夫

藤浪 謙

増田 貞吉

松村 魁

高多 久正

笠 篤吉郎

伊野宮 長民

堀田 圭三

太田 友市

猪木 彦助

金澤病院醫員ヲ命ス

月俸金拾八圓給與 (十二月五日)

河合 忠次

全 (胸部内科)

計見 雄藏

全 (脊柱等外科)

辻 一次

全 (頭部等外科)

關 啓次郎

全 (頭部等外科)

森田 信雄

全 (腹部内科)

林 篤

全 (腹部内科)

中島 誠

全 (眼科)

中島 喜作

全 金澤病院調劑員ヲ命ス

大櫛 秀松

全 月俸拾五圓給與

臼井 順太郎

(十二月十六日)

(十二月二十九日)

(十二月六日)

(以上石川縣)

○卒業式

十一月九日午前十時濟々堂に於て舉行、先づ一同 御眞影を拜し、次に校長は卒業生に証書を授與せられ、次て校長は告辭を、醫學科卒業生總代小原芳雄氏併に藥學科卒業生總代柳澤秀吉氏答詞を朗讀し次て庶務課主幹山崎教授學校の現況及卒業生の動靜等に關し報告せられ、十一時過閉式せり當日貴賓の參列多かりしはことに卒業生諸賢の榮譽ある所として欣賀に堪へざるものなり、左に式辭、答辭、及び卒業生諸氏の姓名を掲ぐ

式 辭

卒業生諸子本校へ茲ニ諸子ノ爲メニ此式典ヲ舉ケ貴賓ノ臨場ヲ請ヒ以テ諸子ノ正ニ本校所定ノ課程ヲ修了シ本校卒業生トシテ必要ナル品格ヲ具備スルコトヲ證明ス是レ實ニ諸子ノ榮譽ニシテ即チ數年一日ノ如ク刻苦黽勉シタル効果タリ然レモ此榮譽アレバ則チ責任モ亦之ニ伴フ自今以往諸子ハ社會ノ機關ニ參リ醫學ニ藥學ニ從來養成シタル實力ヲ根底トシ克ク獨立自重ノ氣象ヲ保持シ學理ヲ研キ實用ニ勵ミ終始怠ラサルコト猶ホ本校ニアルカ如クシ以テ國家保育ノ恩ニ報セサルヘカラズ是レ諸子將來ノ責任ニシテ即チ今日ノ榮譽ヲ全フスル所以ナリ諸子旃ヲ勗メヨ

明治三十七年十一月九日

金澤醫學專門學校校長醫學博士高安右人

答詞

回顧スレバ生等學ニ本校ニ就キシヨリ四星霜、コノ間諸教官ノ懇切ナル指導訓誡ニヨリ今ヤ漸ク醫學ノ梗概ヲ修ムルヲ得、マサニ膝下ヲ辭セントスルニ當リ、茲ニ本日ヲトシテ此盛典ヲ舉ゲラレ、加フルニ貴顯紳士ノ光臨ヲ忝フス、生等ノ光榮何ヲ以テ焉ニ加ヘン、生等今日ノ光榮ハ固ヨリ 主上ノ御懿德ニヨルアリト雖モ、亦校長并ニ諸先生閣下ノ懇篤ナル薰陶ニ仍ラズンバアラズ、今亦校長閣下ハ功實ナル告諭ヲ賜ハリ生等責任ノアル所ヲ明ニセラル、

惟フニ方今人文ノ發展ノ趨勢ハ駸々乎トシテ新面目ヲ披キ、其究極スル所ヲ知ラズ、殊ニ我醫學界ニ在リテ碩學國手踵ヲ接シテ起リ、學ハ日ニ新タニ、技ハ月ニ精シキヲ致スアリ、之ニ重ヌルニ波瀾絶エルナキ社會ハ益々紛擾ヲ以テス、生等身不肖ニシテ、此間ニ處シ、ヨク棹操ニ堪ヘザラン、然リト雖モ一意專念或ハ學ニ、或ハ術ニ、渾身ノ力ヲ尽シ、以テ、皇恩師恩ニ報ヒ、今日ノ榮譽ニ應フルアラシコトヲ期ス、聊カ無辭ヲ陳シテ答詞ニ代フ、

醫學科卒業生總代

小原芳雄

答辭

本年本月本日ヲトシテ本校第十五回藥學科卒業證書授與式ヲ舉ケ校長閣下ヨリ懇到ナル高諭ヲ賜ハル 生等ノ光榮大ナリト云フベシ此ノ榮譽ヲ得シハ素ヨリ 聖明ノ御懿德ニ外ナラスト雖モ亦役長閣下始メ諸先生多年懇篤ナル薰陶ニ據ラスンバアラズ不肖生等爾來益專念一意力ヲ斯學ノ研鑽ニ竭シ一ハ以テ 聖恩ノ萬一ニ報ヒ一ハ以テ諸先生陶冶ノ師恩ニ答ヘンコトヲ誓フ聊カ一言ヲ陳シテ答詞トス

藥學科卒業生總代

柳澤秀吉

醫學科卒業生 (七十一名)

- 小原芳雄 長野 林 篤京都 山本幹雄 石川
- 朝倉重敏 福井 下村義二郎 長野 種子田秀吉 島
- 池田恒太郎 兵庫 中西吉郎 奈良 松山俊夫 和歌山
- 阿部可一 愛知 中村 惠長 野 佐藤 潮 熊本
- 山本長助 石川 森田 信雄 新潟 久保襄一郎 奈良
- 小原德太郎 石川 關 啓次郎 新潟 前田匡俊 福井
- 山田周民 德島 速見 昇長 野 河合忠次 富山
- 廣場敦貴 福井 後藤義賢 石川 富家久男 和歌山
- 江藤潤一 福岡 江崎恒人 德島 稻坂清八 石川
- 猪木彦助 大阪 上野 忠山 梨 青木正枝 山形

榛葉 左傳 靜岡 井上 只次 廣島 辻 一次 石川
 水谷 藤次郎 新潟 伊藤 禮二 岐阜 三股 梅吉 福岡
 高島 一二三 新潟 松村 四郎 石川 佐々木 辰實 岩手
 佐野 愛二 福岡 溝口 美代志 新潟 手束 正胤 德島
 山田 虎一 新潟 石橋 四郎 東京 永井 學造 岐阜
 高 伊三郎 石川 柳澤 長藏 長野 伊藤 善之助 三重
 中島 喜作 茨城 綾部 讓福 岡 福山 可藏 神奈川
 西尾 岱抱 三重 岡田 剛平 石川 本濃 觀造 石川
 若尾 隆吉 和歌山 手塚 泰福 井 仙波 昌秋 石川
 濱地 藤太郎 佐賀 宮崎 稻作 長野 菊地 文岱 秋田
 中島 誠長 野山 田 幽賢 新潟 石田 他人 奈良
 阿部 時雄 宮城 富久尾 湊福 井 中條 俊夫 福井
 柳瀨 恒作 岐阜 林 豐夫 石川 伊藤 顯德 三重
 前野 四郎 福島 計見 雄藏 山形

藥學科卒業生

(九名)

柳澤 秀吉 富山 熊野 勉造 山口 白井 順太郎 東京
 猪飼 史郎 大阪 伊藤 昌平 東京 寺田 久一郎 富山
 大櫛 秀松 石川 柳 榮太郎 石川 森 茂 石川

○十全會大茶話會

卒業式々後直ちに濟々堂に於て大茶話會を開かる、嚴肅
 式場を装ひたる椅子テーブル等は忽ち撤去せられ、例

の敷物の上に師弟膝を交へ、待つ間程なく會長小川教授
 圓轉滑脱の語氣を以て開會を報し、次々に理事大西教授、
 石川櫻井高安諸先生、建部學生總代小原卒業生總代の演
 說祝辭等を以てす、人々稍倦色ある時に、茶菓すし等を
 配布せられ、靜かなりし會場忽ち色めき立ちしは流石に
 人は正直なるものなり、やがて福見助教の謠、狂言師
 の狂言數番あり、終りに卒業生伊藤顯德氏の御名殘狂言
 として得意の講談あり人をして腹抱絶倒せしめき、午後
 五時頃 兩陛下の萬歳を三唱し和氣藹々の裡に散會した
 りき。

○金子教授歸校式

客臘十二月四日獨國留學滿期歸任されし教授金子治郎先
 生の爲め、同月十日午後一時濟々堂に於て嚴肅なる歸校
 式を擧げられ、校長の式辭、金子教授の答辭、建部學生
 總代の祝辭等ありたり、われ等の無事歸朝されたる、先
 生の溫容を拜するを喜ふと共に本校の爲め益々御自愛あ
 らんことを切望す、

○校歌 本校曩きに校歌なきを遺憾とす、全窓間に募り、

之を第四高等學校教授藤井紫影氏又囑して高選を忝ふせ
 り、而して其の月桂冠を得られたるは雨城野村義雄君な
 り、茲に雨城君の榮譽を稱すると共に紫影氏の高選を多

謝す

譜は石川縣師範學校教諭新清次郎氏のことゝ當校のため
に作られたるものなり、併せて茲に謝意を表す

(注意) 此譜ナニ回讀ツテ一章ヲ終ルモノトス、
第二章第三章マタ同シ、第三章ノ歌モ此例ニ倣フベシ、

(ト調四分ノ四拍子)

| | | | | | | | | | | | | | |
|------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 少シ早ク | 1. 1. 5. 5. 6. 5. 6. 1. 2. 2. 3. 2. 0 | 1. 1. 5. 5. 6. 5. 6. 1. 2. 2. 3. 2. 0 | 1. 1. 5. 5. 6. 5. 6. 1. 2. 2. 3. 2. 0 | 1. 1. 5. 5. 6. 5. 6. 1. 2. 2. 3. 2. 0 | | | | | | | | | |
| (一) | クニスイ | ニウスハ | ユベメ子 | タ一一 | カキチコ | ナカコゴ | ルマコシ | 一クロキ | アホフヤ | キクリマ | ツカオニ | シロココ | マノシソ |
| (二) | オナハキ | サ一一 | マミゲヨ | ルニメキ | ミフツケ | ヨチガシ | チ子トキ | 一リモハ | アミモミ | フチロユ | ギキトル | ツタモナ | ツロニレ |
| | アオナア | シナスラ | タツペナ | ハ一キミ | タミコタ | カチトカ | キフノキ | 一ム一一 | ハマカウ | クナタミ | サビシミ | ンチトロ | ノガテソ |
| | ユユチタ | 一クノフ | キテコト | ニノ一キ | コヒムタ | コカナマ | ロリシ | チ一クハ | ナタヤシ | ゾノムヅ | ラモベム | ヘシキナ | テヤカレ |

醫學專門學校歌

第一章

國ゆたかなる秋津洲

治まる御代を仰さつゝ

あしたは高き白山の

ゆうべさかまく北海の
おなじ道ふむ學び男が

第二章

進め雄心ふり起し

なすべき事の難しとて
岩根こぼしき山にこそ

荒波たかさ海にこそ

第三章

螢のひかり雪の窓

學びの道にいろしみつ
神にちざりて天皇の

國に盡さん仁術の

雪に心をなすらへて。

波に武をねり身をさたい
前途の光たのもしや

闘め我が友もろ共よ

男の子空しく止むべきか。

清きけしきは見ゆるなれ
たふとさ珠は沈むなれ

四年あまりの春秋を

赤さ心を千早ふる。

長さみ詔かしくみて
高さほまれを世にのこせ

○解剖遺體法要

昨年十一月より本年十月迄の學用患者
解剖遺體の法要を去る十月二十九日午後一時野田寺町立
像寺に於て執行せらる高安校長以下教職員及生徒一同參
詣したり
因に解剖遺體は男女總計六十九體なり

○長距離競走

雨城生

草鞋を求めての歸るさ、明日はーと仰げば嬉しや一天梨

地の星月夜。

とり揃へたる草鞋、脚胖、巻きたる外套枕の、明日は身辰ノ口に日頃鍛ひし膝栗毛、一鞭あてら月桂冠を得んと勇み又勇む。華胥の國に勝を占め、快哉と叫ばんとして聲遂に出でず、曉の夢果敢なく覺めぬ。時既に四時に近し、眼擦りつゝ身仕度終り、宿婦が用意の辨當確かに、停車場に駆けつければ、學生の集まるもの場に満つ。

仰げば残んの月影光淡く、一面にみつる星、襟を縫ふさむき風、快哉といふは只瘦我慢たるを失はず。午前五時四十分、一同列をなして乗車す、一聲の凜笛は車掌の口笛に應じて冷たき空氣に響き渡りつ、車輪は進行を始めぬ。車窓より望めば光なき電燈尙眠れる市街を照らし、颯たる曉風嚴霜の氣を帯びて征衣頗る冷かなり。忽ち起る窓内妙音の一吟、衆の雜談爲め潜み、振腕爲めに崩れ、人をして酔はしめんとす。續いて一友こたび新たになれる校歌を歌ひ出づれば、一行之れに和し耳も爲めに聳せん計り。

凜車は松任譯に着し、唱歌は此に中絶す。再び發し、校歌の聲幾度か繰り返へさるゝうち、手取川に至る。東天漸く紅々、朝暎空を蹴つて暉光映發、空を彩る紅、綠、黃、濃、淡の雲の様、花や艶、月や清なりと雖も麗にして奇なるものは雲なる哉。

美川驛まで下車、だらしなき人員調査あり、秋晴の佳日、天晴れて氣爽やかなり。寂然たる美川の里を過ぎ、水島に向ふ、小川あり、水極めて清冽。兩岸の木々凡て紅葉し、百舌一羽梢にしばなきてゆく秋を唄ふ。

勇ましき軍歌、校歌に朝の閑靜を破りつゝ、小徑を辿り行く。孤村を出で、林に入り、又田徑に出づ、道端にのこる野菊の花、あゝ秋の詩は至る所に盡きし。

前には雪の妙に包まれたる白山高く聳む、山脈遠く連りて遙かに見ゆる加越の峰巒、未だ朝靄の裡に眠れるが如し。

午前七時三十分、水島より到る、長途競走ハ之れより辰ノ口に至る里約二里七町の間に行はれんとす、湯目部長先發として辰ノ口に向はる。松田先生よりこの競走に就きての注意あり。

すらりと居並びたる面々、何れも逞しげの男子のみ。或は襯衣サルマタにいで立つもの、或は紺脚胖の姿凛々しく、或ハ越中褌など滑稽なるもあり。走る者十五人を一組となし、十分毎に發せしむ。

甲乙劣らぬ剛の者、目指すはかの辰ノ口！三里たらずの里程、何のこれしきかと勇み立ちて進む。

かくて余も荒葉子と共に駆けんとし、第五回の列に加は

* * * * *

る。(編輯小僧曰、雨生君ガツンリ！必敗は保証だ！)始め四丁五丁が程は皆飛脚の様、或は先んじ或は後れ、半途にして廢するあり、勇を鼓してつゞくあり、へビー掛けて飛び出すあり、流汗淋漓、拭ふに暇なく、決勝点に近けば競走いよく激甚に、疲れし体の八万四千の毛穴より、湯氣逆らん計り、出す最後の精力、互に凌ぐ勝敗の決、壯なる哉此舉、快なる哉此行。

國旗を交叉せる決勝点に入れば福見先生、微笑しつゝ、競技者の札によりて決を取らる。余辛くも四十分にして着、直ちに松崎といふ旅宿に入る。

先着の友巳に各室を占領し、あらしき縞の浴衣着て浴場に赴く。余等またこの怪しげなる浴衣を纏ひ、互に顔見合せて笑ふ。至れば湯槽の中に六尺男十幾人。蒸氣と水沫四方襲ひて快いふべからず。

浴后宿舍の二階に上り、棒の如き足投げ出して擦る。一行或は吟ずるもの、歌ふもの、横はるもの、立つもの、欄によるもの、辨當ひらくもの、ものし終はる者、あゝ昨日は金城々下大手町懐かしの校に、鉄筆とりて恩師の教講に頭を捻りたるもの、今は思ひくの行動、一月に一度位かくありたしとは、そも誰の耳語？、既にして命あり、賞牌授與式を舉ぐと。

來り見よ、中原の鹿何人の手に落つるかど。第一着は誰

ならむ、彼にやあらむ、某必ずや勝てり、某或は敗れたりなど、各々がよしなき推を弄して一室に會す。湯目先生先づ立ちて壯重なる態度に、本會の満足と希望とを述べられ、次いで石川先生、校長に代はられて左記優勝者に賞品賞牌を授與せらる、蓋し高安校長故ありて遅參せられたるに由る、式全く終はり、わかたれたる色好き柿、數二つ。時正に二時、猶美川驛に到らむも早し、いで近隣の勝地探らばやと二三うちつれ、奇しき鼻緒の下駄引きかけて立つ。辰ノ口！辰ノ口！名の大なるがごとし、其實然らず、人家僅かに三十余、中央の宿舍四五、稍樓の構造に意を用ひ、風致一村の美を極め、懇遇以て浴客を待つのみ。湯女が歌へる一節の謠に、耳傾くる多恨の友予いと笑止なる。

此地必ずや幽邃奇勝、山光水色の見るべきものあらんとし、彼方此方彷徨へども遂に得ず、不思議顔に眺むる里の翁よ問ひたれど、黙して言はず、語解せざるにや。止むなく意のゆくまゝ、歩を進むる程に漸く小岳に達す、石階を拾ひて上れば觀音堂なり、乃ち賽す。

堂の横より右すれば、拓けたる四町あまりの平地あり、こゝに久し振りにて號令の練習を行ひ、小高き山に上る。嘗狩の發議者あり、今頃とて冷笑する者あり、余「白樂天」の一節を謠ふ。互に愚痴もらしつゝ、宿舍に歸れば、多く

は立たんとし、止まるもの妙し。余等また宿を辭して美川に向ふ。

美川に着すれば、夕陽既に西山に落ち、暮色蒼然、やがて我世は夜の幕に襲はれんとす。廣からざる停車場待合室に押し入り、一同發車の時刻を待つ、此に名物餠餅を頌たる。列車は頓て轟々とレールを軋りて上り來りぬ。先を競ふて之に打ち乗り、談笑の間に發す、六時三十分、松任驛は吟唱騒々の裡に過ぎ去りて金澤に着し、一同下車す。

之れより例の提灯列あり、步調整々、校歌高らかに市民を驚かす。午後七時十分無事着校、門前に萬歳を三唱して散す。

時はこれ白露黄葉の秋、十月三十日。

* * * * *

先きに辰ノ口に於て、賞品賞牌を得たる健兒の姓名を擧ぐれば

| | | |
|------------------------|------------------------|-------|
| 一等 | 二九、五〇 <small>分</small> | 吉田宗一 |
| 二等 | 三〇、三五 | 赤尾肇三 |
| 三等 | 三一、一六 | 中村欣一郎 |
| 四等 | 三一、一七 | 吉野要 |
| 五等 | 三二、三五 | 白峯慶敏 |
| 三三、五六 <small>分</small> | 屋富祖慶次郎 | |
| | 三四、〇〇 <small>分</small> | 金平鉄太郎 |

(會報)

| | | | |
|------|-------|------|-------|
| 三四二五 | 武藤匡一 | 三四四〇 | 牛塚榮太郎 |
| 三四四〇 | 額又太郎 | 三四四〇 | 丸谷熊次郎 |
| 三四四五 | 若林篤之 | 三四四七 | 笹田順三 |
| 三四四七 | 秋山八百藏 | 三四四八 | 島田義一 |
| 三四四九 | 北川光雄 | 三四五一 | 高野友衛 |
| 三五〇七 | 山田伊之助 | 三五一三 | 若林古福 |
| 三五一四 | 井上只二 | 三五一五 | 老川雪房 |
| 三五二一 | 佐藤武 | 三五一七 | 小黒仁太郎 |
| 三五二一 | 池野清正 | 三五二二 | 堀口貞太郎 |
| 三五二七 | 内海友七 | 三五三二 | 平原雲新 |
| 三五五五 | 尾崎平吉 | 三六〇〇 | 岡田秀造 |
| 三六〇〇 | 廣瀬清龍 | 三六〇一 | 岡田基保 |
| 三六〇五 | 吉川友信 | 三六一五 | 高橋義之 |
| 三六一八 | 林可一 | 三六二三 | 塚本富彦 |
| 三六二七 | 仙波松齋 | 三六四五 | 中野鑄太郎 |
| 三六四八 | 鈴木修一 | 三六五五 | 山脇熊人 |
| 三七〇〇 | 石橋三也 | 三七〇二 | 月岡勝二 |
| 三七〇五 | 小林進 | 三七一五 | 鷹見義郎 |
| 三七二〇 | 太田勘市 | 三七四〇 | 柴原外男 |
| 三七四三 | 今村文碩 | 三七五五 | 瀧澤武藏 |
| 三八〇六 | 金子義長 | 三八〇七 | 岡崎寅次郎 |
| 三八二六 | 高野正二 | | |

○會員動靜

▲佐々木教授 去十月十五日伯林府に安着せられ當今前

號掲載せる柳氏と同宿せらるゝ由來報ありたり

▲金子教授 豫て獨國留學中なりし同教授には客臘四日無恙歸校せらる

▲中屋講師 豫備中尉として應召せられたる同工學士には戰地に於て或る重要な任務を遂行せられ歸途不幸にも胸部貫通銃創を受け我々をして大に傷心せしめたりしが此程全く快復せられ元隊に復歸せられたる由

▲林助教授 充員應召中なる同助教授には戰地に於て罹病金澤豫備病院に後送せられたるか此程全快同病院に勤務せらる

▲渡邊十治氏 豫備三等軍醫なる同氏は戰地にて脚氣病に罹り仙臺豫備病院に後送せられ目下全快同宮城野分院に勤務せらる

▲森岡惣太郎氏 嘗て病理學講師たりしが目下郷里大阪東區京橋三丁目に開業せらる

▲高柳書記 十一月二十日補充員應召後備歩兵第五十七聯隊に編入せらる吾人の筆又代ふに劔を以て國事に尽瘁せられんとを切望す

▲杉山弘齋氏 中村と改性從來の如く郷里に於て開業

▲久木勝作氏 東京醫科大學に於て研究中なりしが此程福井縣武生町に開業せらる

▲見習醫官 會員中近頃見習醫官を命せられたる諸氏左

の如し

吉田幡誠(步七) 加納景成(同) 齊藤賢徳(同) 松山

俊夫(同) 佐藤 潮(同) 小原徳太郎(同) 佐野愛二

(同) 石橋四郎(同) 柳瀬恒作(同)

▲一年志願兵 として入營せられたる諸氏左の如し

堤泰造(步九) 河崎有作(步一) 伊野宮長民(步七)

細田榮(步七) 前田豊作(步三十五) 堀田圭三(步七)

太田友市(步七) 笠雋吉郎(步四十七) 廣場改内藤敦

貴(步三十五) 宮崎稻作(步三十五) 濱地藤太郎(同)

富家久男(步三十八) 伊藤禮二(步三十三) 上野忠

(不明) 綾部讓(不明) 若尾隆吉(不明)

▲海軍々醫候補生 試験に及第せられたる諸氏

佐々木辰實 伊藤賢徳

▲小原芳雄氏 本校病理學副手を命せらる

▲金澤病院醫員及調劑員 を命せられたる會員の姓名は

叙任欄内より明なり

▲榛葉左傳氏 能美郡小松町勝木醫院より赴任せらる

▲前田匡俊氏 本校外科教室副手を囑托せらる

▲辻村耕夫氏の開業 特別會員なる同氏は卒業后京都醫科大學病院に入り以來内科皮膚病、梅毒科に助手として勤務のところが去年十月より郷里なる三河國豊橋町に於て辻村病院をたて汎く濟務に従事せられたり

通信

○佐々木達君通信第三

(十月二日アデーシ發)
小川教授宛

福州は普通寄港せざるも九日夜半二時吳淞を發したる
(上海九日午后六時發小蒸瀛にて七時過吳淞本船に歸る)
船は十一日午前七時福州沖着潮流を待て午前十時閩江を
逆り十二時馬尾に着せり福州の端舟まで三時間上らざる
べからず時間なき爲め見合せたり

扱て俗に總稱して福州と稱する閩江下流は所謂福州艦隊
の根據地にて江の瓢形を呈し然し狭き所あり兩側に砲門
を顯し旅順に類するやの感あり且此停船したる馬尾は大
なる數個の船渠を有し佛人之を管理ス又日本屋一軒あり
「ホテル」を業とす日本語及英語に通ずる支那端舟の案内
にて馬尾及「ファコダ」塔と稱する七八層の高き石塔に
上れり又對岸に獨乙石油會社あり之が爲に寄港するもの
なるや辨せず福州には日本人百余名居り支那人の尊敬を
受くると云ふ此日始めて外國の端舟に乗る端舟は何地も
不正なり失敗談の種となる此馬尾にては一人各五拾錢宛
にて四人乗りしが日本家にて聞けば四人合計五拾錢で澤
山なりと云ふ然れども二三時間信所案内しくれたる者故

一人廿錢宛八拾錢を與へしに彼は一人五拾錢なりと受
けず當方は四人合計五拾錢なりと有邪無邪にせんとす斯
る時には「チー」チー「コー」コーと云ふて杖を振り廻せば良
けれど余り酷取合計壹圓を與へしに悦びて退り實際誠に
廉なれど彼等生活程度甚だ低く一日一人五錢乃至拾錢に
て足れると云へを其廉なるか相當ならん其他着船するや
否や支那人は船内に種々の物品を持ち來り賣付くる熱心
の程度には感服せり之に反する西洋人の「ヒヤカシ」はに
くらしむやらをかしむやら實に面白し支那人も非常に懸
値を云ひ半分錢を四分ノ一位にまけると少からず兩方が
惡しのか知らん、十二日午前九時閩江を下り香港に向ふ茲
に着たのは十三日午後六時で棧橋に着く筈であつたのが
皆塞りたる爲め海上に停泊した但し香港は一の小島で棧
橋は其對岸にあり小蒸瀛にて十五分毎又往復して居るの
だ處が船は中流に留たのだから例の端舟を雇はねばなら
ぬ幸に坂田君か此香港に下るだから「アメリカ」ホテルの
小蒸瀛に乗せて貰つた(ゼロノ積)處か上陸して聞けば端
舟代一人前壹圓と聞て大に驚く(元來支那端舟なれば拾
錢で澤山だと云ふ)處で「ホテル」に宿るは不經濟だと云
ふので香港夜景を坂田君に案内して貰ふて本船に歸る事
にした處で又端舟だ始めに代價を聞くと勝手に高い事を
云ふから點て乗て下るときに宜い加減に拂へと云ふから

先づだんまり乗たすると三人壹圓呉れと云ふよしと云ひて本船に歸り其入口にて三拾錢たゞき付て入込むとくいついて來るのを船員が入船を許さないで「大」と口を開けて漠然と去た先づ之れは成功した扱翌十四日には白晝本式に見物に行かねはならぬ端舟は前の法で「ヨシノ」と云て乗たら一人五拾錢宛三人壹圓五拾錢と云ふ正に岸に付かんとして金を請求す由て三人分合計五拾錢を與へしに是れは一人分なりとて舟を岸に付けざるには閉口し壹圓を與へて岸に上る事を得たり見物の歸りには新案を廻はさざるへからす今度の「通貨船内にあり、來れ」とて先づ本船に導き四拾錢にて追拂へり斯の如く此香港の端舟代は一人前一回壹圓より拾錢の差あり奇なり扱て香港は長崎か横濱の様で山腹にあり平地少なき故數里の絶頂までか奥あり海中より望む夜景甚た美なり家屋の構造は上海よりも層一層西洋風にて多くは四五層以上なり道路亦「セメント」を以て固く上海よりも一層清潔にして已に西洋に入りたる感あり人種は支那人西洋人相半し日本人は甚た少し日本「ホテル」もあるけれども行かざりし此地有名の「ピック」と稱するものは電氣作用と鉄線にて列車に人に乗せたるものを山腹を一直線に上下せしむるものなり(ニマイル位)香港は狭き故前夜の散歩せし道を便りて「ピック」を求めしに得ず遂に三井物産會社の

別宅へ支那人に案内せられ(兼て土肥慶藏氏認可状を持ち)支那人は日本人と見れば案内す)同支店長法學士南新吾氏及丸井一平氏を訪ひ日本食を受け同店召使日本人某の案内にて「ピック」に上り歸途繪はがきを求め三井物産店にて認め十一時本船に歸る途上時々暴雨に會せり毫も暑氣を覺せず正午十二時の出帆に延引して午后四時香港出帆「シンガポール」に向ふ

新嘉坡に着したのは十八日の午后六時半なりし此地の棧橋は一哩以上に亘る有名の長きものにて此棧橋に横付きになつたのは甚た愉快です處か日は已に没し市街迄は三哩あり人力馬車あるも日本旅館に案内し得るものなしと云ふ(言語不通の爲)目指す積田館と云ふ日本旅館なり處が去る十六日來近付になりたる英國工兵士官は新嘉坡在勤の人にて日本語を話し且積田旅館を知る人にて積田旅館迄馬車をあつらへ呉れたり而して馬車に三人乗りたるも言語分らず印度御者の案内なれば三人の心中にて何れの處へ連れ行かるるやも難斗との感も起りたるなり馬車は海岸の淋しき町を通過し行き先き分らず行くと凡そ一時間半にして一屋の前に達す三階造西館の角家なり余り清潔ならず夜分にて分らず戸を開きて入れは日本人一名あり正しく積田旅館ならんと案内せられて三階の廣間に入る女主出て來り談するを聞くに積田旅館に非ず然れ

ども最早入室せしと故轉宿せざるとなせり直ちに日本「ボーイ」を引き連れ市街の夜景を見る棧橋旅宿間の寂漠たる所は西洋町にして夜間は戸を閉ぢ營業をなさず（是は上海香港皆然り）旅館より向て町には支那町マレイ町印度町あり甚た振ふと上海香港に均し人種は世界各國の雜居にて街上各人種の展覽會の如しマレイ人あり支那人あり印度人あり就中マレイ人多し洋人は少なく日本人は殆んど見る事なし只支那日本及西洋娼樓あり日本醜業婦は千余ニ及ぶと云ふ殊に醜業婦の多少は其國人の勢力と反比例なりと云ふ國辱と云ふ可し嗚呼此夜マレイ人の芝居見物に出掛けたるも日曜の爲め休みであつた

儲て余輩の投じたる旅館は松屋旅館と稱し海岸にあり景色宜しと雖ども己に古びたるものゝ如し家屋は洋風堅固にして室内も廣く天井も高しと雖稍不潔にして修復掃除行届さるものゝ如し特に風呂場便所とさては支那風か印度風か知らねど甚た不潔なり上海東和洋行より下等なり且日露開戦以來郵便會社の交通なき爲め甚た寂漠たり渴望する日本食も支那米にて甚たまざし御馳走も余り感心せざりし其代り旅館は廉にして一泊貳圓なり翌十九日早朝六時晨起朝食前馬車を命じ前夜の龜と云ふ「ボーイ」を引き連れ馬車に乘し植物園を見る園内廣く清潔にして一種の公園なり植物は我國のものゝ殆んど全く異れり細く

長きもの多し就中椰子木著明なり種々珍奇の植物少からず専門家も見せたいと切なり僕等の肩目か見るのはもつたいと思ふた動物も少々居るけれど感心なるものはない辭して歸途相變らず繪はがきを日本雜貨店に求め九時歸宿未た本船の出帆時間分らざる爲め朝食后はがきを認めつゝ出帆時間の報知を待てり（印度地方の食事は朝七時頃「コーヒ」と「パン」を食し十時朝食飯なく六時夕食にて二食なり）愈出帆時間は明廿日午前八時と定つたから十二時半から瀛車に乗ると一時間「ジョホール」と云ふ所に行た元來新嘉坡も一島で此島を横斷する瀛車に乗て海岸に出ると其對岸は大陸で瀛車に連續する小蒸氣を對岸に渡すと馬關海峽の如し此對岸の町が「ジョホール」の町で「マレイ」國の都府らしい風景の甚た宜敷く又冷しき塲所だから新嘉坡から遊覽に行くものが多い大坂神戸の須磨明石か東京横濱の箱根か鎌倉、江ノ島と云ふ様な所だ立派なる「ジョホール」ホテルが海岸に聳てをる高價たと云ふから入らなかつた「マレイ」宮殿の拜覽狀を貰ひに行た即ち「マレイ」國王は已に没し其王子は目下「ロンドン」にあり恰も琉球の如き状態らしい主人公は居らねど立派な宮殿がある此案内狀を得し爲ふ「ボーイ」龜が「ジョホール」「ホテル」に入つたか中々出て來ない時間は費ねるから僕が見に行つた處か「セントルマン」でなければ話を

しないと云ふから僕に話をして呉れと云ふ處が日本人は「マレイ」語は勿論英語も分からんから神戸を招き話したら早速狀を呉れたろこで馬車に乗り宮殿の庭内を一覽し宮殿に臨んだ其處には「マレイ」人の兵隊散在し又宮殿の入口にも兵士が案内狀を受け取り各室を案内し呉れた室内の裝飾設備共中々立派西洋風で日本地の様な磁器もあり漆器もある濱御殿も斯くやと思れた案内兵に酒手として金膏圓を興へて出た次で海岸に寺院様の一塔に入つた塔内は無一物の千疊敷位のものとして天井も甚だ高し且清潔なり只一隅又は語を真金板上彫刻したるものあるのみよて眞の無一物なるはいと奇なり祭日又は門徒僧侶の集合するものならん次で「マレイ」町支那町を廻つた相變らずの不潔此不潔町内は四五日前に開店したる日本理髮店あり投して休息し「ラムチ」を飲み三時半海岸小蒸氣に乗り對岸瀛車にて四時半新嘉坡蹄着途上博物館に立寄り(狭く材料少く見る可き價値なし)烟草を求め(烟草は日本の半額以下なりと云ふ)六時歸宿夕飯八時より散歩し九時より「マレイ」芝居を見る西洋風にして服裝美舞台を變化すると多く大凡其仕組を推察せしむ支那芝居に優ると數倍然れども旨味なく日本芝居に劣る事數倍時間九時より十二時迄三時間二等五拾錢一等壹圓食物は「ラムチ」「アイスクリーム」を自辨にて食す小屋は小にし

て福助座よりも甚だ小なり來客は二百以上を容るゝ能はず但し皆椅子なり十時半辭し人力車にて歸船せしは十二時半なりき此新嘉坡は失敗なく十分に見物をする事得たり是れ恐くは航海中の上出来ならん新嘉坡は英國領の自由港にて税關もなく租税もなく何人にも自由自在にて何時でも營業を始め得るから諸方から種々雑多の人種が集て來る譯になる又税かないから物價も安い又香港の様に地面が急屈てないから三階以上の家は少ない殊に海岸及西洋町の如きは廣々として諸所又電燈輝き道路は悉く「セメント」にて固め恰も公園の様です暑氣は航海中で一番暑いらし特に春夏秋冬共に變化なし然れども九十度位だと云ふ日中ハ暑いが朝夕は冷しい時々暴雨ありと云ふ九月廿日午前八時新嘉坡發「ペナン」に向ふ「ペナン」に着いたのは九月廿二日午後一時なり此地は余り名のない港なり停泊時間も少いから上陸は不贊成だが有名な植物園と支那寺あり且日本旅館は之で終りたと云ふて居る處へ日本旅館へ案内をしようと云ふ印度旅行者が乗り込み澤山日本人の名刺を見せるから稍安心して案内せしめ端舟に乗て上陸するや否や馬車を雇ひ呉れ舟代三圓を請求す是は高いと云ふので旅館へ着てから兩替し

て拂ふと云ふたら船頭は直に拂へねばならぬ且近傍に兩替があるからと云ふて連れて行こふと云ふたから仕方なしに大毎三圓を拂ふて馬車に乗て日本旅館力万と云ふ家より行き端舟代を聞くより一人前廿錢で宜しと云ふた馬車代も二圓呉れと云ふたのをかみさんが叱り付けて三四拾錢與へたと思つた随分ひどい處だ己も二時過て六時の出帆だと云ふだから早速植物園と支那寺へ行かんとして馬車を雇ふとしたら六圓を請求せりかみさんが叱り付けて貳圓五拾錢にさまつたこんな失敗と少し注意すればないのだけれども是迄上出來であつたものだから多少失敗談もなければ面白くなかうと云ふ考へから起つたと云ふのは負惜みではない特に此「ペナン」は始て助力なく上陸したのたね一儲て馬車に乗て市内を見ると新嘉坡よりと數倍下等支那人三分「マレイ」人三分印度人三分西洋人一分と云ふ様な割合ならん日本人は最も少なく娼樓三十軒商家十軒内旅館二、醫師二、其他吹失店なりと云ふ尙此地迄も日本醜業婦の進入し居るとは案外の至りなり市内に之粗末なる瀛車を通す鐵道馬車二個に二階を付け氣鐘車を付けたるの如き小き市内鐵道なり甚だ奇觀を呈せり馬車にて行く事一時間余にして支那寺に達す山腹に在り登る事數町又寺内も坂にて上る事數町なり名は極樂寺と稱す釋迦を祭る日本に例ふる者なし只奇麗な寺が山腹に在ると云ふ外なし又行く事

一時余にして植物園に達す此園は甚だ廣大にして山を以て圍み深山に入るの感あり山高く深く青々たる事岐阜の金華山に類似す園内の左手に瀧あり遠く高山に水源あると云ふも未だ其水源を見たるものなし數十年兵士數十名水源を求むる爲め上りしよ未だ歸り來ずと云ふ恐くと窒息せしならん乎此瀧の水の一部を一箇に集め市内水道に供す見物終りて日本旅館より歸りし之午後五時過ぎなり最早出帆に近づき食事沐浴の余暇なし早速葉書數枚を認め人力車にて海岸に至れば先前三兩を奪ひたる案内者づらゝ敷も出で來り亦端舟に案内す（今度旅宿の小僧付き來り三人六拾錢で宜しと云ふ）正に本船に着せんとして壹圓を請求す波暴く轉覆に垂々とするが如し面倒なりとて壹圓を與へ乗船せしよ尙船室内に入り酒手を請求す叱して去らしむ實に鐵面皮と云ふ可し能く其面を見れば黒光りして鉄色を呈する印度人あり廿一日午後六時出帆は延び八時「ペナン」出帆「コロンボ」に向ふ今度海上四晝夜に亘り今日迄に一番長き航海なり。「コロンボ」は停船したのは廿五日午後六時なり去廿日より六日間當地方に有名なる Harbour と云ふ向風に出逢ひ船の動搖強く風音劇しく甲板上の旅客は漸々減少し食堂も寂漠となり食欲振はず頭は重く誠に不愉快にして同行の一人は二日間絶食せり蓋し船暈と稱するものは未だ病理明かならざる

も恐くは一種の腦貧血にして反射的に胃症を呈するものに非ずや其病状は全く腦貧血にして暫時の眩暈を呈し顔面青ざめ冷汗を流し嘔吐するに至る然れども眩暈時に直に平服すれば快復するものなり此腦貧血は全身の動搖振蕩より來るか故に船の動搖に従ふて全身の平均を取る事に慣るれば此船暈を免かるゝ事ならん乎他日の研究を待たん(今日は頭重く熟慮の余地なし)

楮て話か横入りしたが右の如く六日間不愉快の生活をして來たから「コロンボ」には是非上陸せんとて楽しんで居た又釋迦と關係深き「セイロン」島の一港だから見る可き事も多からん四晝夜續きの航海で又次の「アデーラ」は一週日も航海が續くから停泊時間も多からんと想像して居た處が停泊は數時間に過ぎないと云ふ説あり又見る可き物なしと云ふ説あり又最も美麗なる港なり是非上陸す可き價值ありと云ふ者あり愈港に近寄りて見ると事實は成程奇麗相あり殊に日之没して居るから燈火は甚だ美麗で特に一方では青色の燈火か幾何となく正しく整列して居る其奇麗さ云はん方なし出帆時間愈明廿六日午前十時の掲示か出た其以前より「ホテル」の宿引を澤山船内に入込て居て宿泊料は不扱方室内庭園の寫眞を印刷した小本を捲きて居る中に「グランド、オリエンタル、ホテル」と云ふのは横濱にもあり且船内にて聞き及んで居たから此宿に

投じ様と思ふて居ると一人の印度人が「今晚は」と日本語を云つた「グランドホテル」の小本を出し且數十枚の日本人の名刺を出した端舟代を聞けば六「ペンス」(廿五錢斗り)と云ふ價も相當らしいから宜しと出て案内させられた陸すると端舟代之後で宜しと云ひてすん／＼徒歩して案内して行く余り近くもないのよ車にも乗せない(途上車屋か進むれば叱り付る)十五分か二十分斗り徒歩して「ホテル」に臨んだ夜で暗いから能くは分らないが余り立派でない之れが「グランド、ホテル」かと聞けば「エース／＼」と云ひてすん／＼案内して入て行く入ると大廣間で食堂らしい處を通過して二階又入れは薄暗くして道幅狭く薄氣味悪き様なり此薄暗き所に待たせて燈火を点じ甘疊斗りの廣き室に三人を入れた三人は中央の丸「テーブル」を圍て腰掛ると彼の印度人は夥多の日本名刺を出し殊に証明のあるものを示す其要点を擧ぐれば日本に三月斗り居りたる事あり心切に能く案内すと云ふ又山縣大將も案内したと云ふ其名刺中には有名な人もあつた室は余り立派でないけれども稍安心した其處で相變らず早速はがき及切手を欲いと云ふと案内するから散步旁買ひに行けと云ふから誘れて散歩すると人力車夫が進める乞食が附き來るのを一々叱り付て居る中々心切で精ん家らしい楮て歸宿すると明日は六時に起き「コーヒ」と「パン」と

を出すから之を食して朝飯前に案内をしよ」と云ふ當方の臨む所で釋迦の死んだ「カンヂー」を七十哩あるから瀛車はあるけれど明朝の出帆には六ヶ敷から三時間で往復の出来る釋迦寺に案内すと云ふ就て馬車代及案内料を問ふたら馬車代一「ポンド」案内料二「ポンド」だと云ふ一「ポンド」は日本の拾圓なり三時間一寺院を見物するに貳拾圓とは余り安くない僕は中止説を稱へたすると案内料を半「ポンド」に減ずると云ひ出した元々相場は分らず一度云ひ出した事でもあるから終に見に行く事に定まつた彼黒人は明朝六時を約して歸つた僕等ははがきを書きに掛つた僕ははがき卅枚と電報一通を認め夜半二時に及で寝た手紙に皆立派に「グランドホテル」と書いたから御笑い「ホテル」と云ふ者は最少し奇麗な者でなきやとの念を抱て床に入ると一方には一人一隅には二人寢台あるのみにて二人寢台中に入つたら枕はあれども掛蒲團もなく寝衣もないので洋服其儘ねころんだ心持の悪るさ折角の上陸も安眠は出来なかつた明くれば廿六日午前六時起上りて室内を見ると立派でない便所を尋て行て見れば甚だ不潔にして支那流に近く到底腰掛で大便が出来ないので小便を垂れて歸つた約束の黒人は來た「コーヒー」と「パン」も來た其器物も立派でない黒人の案内で馬車に乗た市街は成程新嘉坡「ペナン」よりも立派だ支那人は殆ど跡を絶つた日本

人は一人も居らんと云ふ電鐵は運轉してをる然れども我東京には及ばない人種は主として印度人らしい馬車は漸々進行して一の立派な鐵橋を渡ると眞の田舎だ行く事一時間計りにして田舎の古寺に達した釋迦が觀音の像あるのみにて奇い事もなく一「ポンド」半の價値は少しもない色々案内するけれども時間か費へるから急ぎ元の道を馬車で歸た正に九時に垂々として居る早々朝飯を終へ海岸に急ぎ今度は幸に小蒸氣に乗て歸た此上陸費用を計算すると三人合計三「ポンド」半即ち卅五圓だ此地の物價が分らないから遣られたらしい殊に歸途旅館表札を見れば「ブリーチ、インド、ホテル」とあり「グランドホテル」と云ふのは別に立派に海岸に在るのを見た且此「グランドホテル」の宿泊料は貳圓五拾錢乃至參圓と書てあるのみ吾二行は四圓計り宿料を取られて居るどーも高い旅料で安き寄宿類似ものに宿められたらしい兎に角遣られたらしいけれども分らぬ内は花さ此「コロンボ」の上陸は面白味最も少なくて費用は最も多いのです蓋し此怪物屋敷を演ぜしめたる代價ならん此「コロンボ」には Chiffre Hotel とて規模廣大にして極めて美麗なる宮殿様の有名の「ホテル」あり此「ホテル」を見ん爲め上陸するもの多し先よ「コロンボ」到着の時無数の燈火整列したるは此「ホテル」なり此見物を見落したるは残念なり

大部話か常規を離れ面白くなつて来たが表題は何と云て居るかは知らねど洋行膝栗毛とでもしたらどーです然れども重き頭を以て急届な室内でたためを盗み書きたるものから此意味のみを取て文章は全く書き改めて貰ひたい然らざれば面白味も無かるし分らない人も有る此事は呉れくも切望します此記事の儘讀む事は中々骨折と思ひます

前報に船の速力を落したと思ひますから追加します最近經驗での速力の早き時は二十四時間に三百六十哩遅きときは三百十四哩でした故に一時間の速力は早くて十五哩です序に各停泊地間の距離を申し上げます

| 港名 | 距離 (哩) | 時間 (分) | 時間 (時) |
|---------|--------|--------|--------|
| 横濱神戸間 | 330 | 2 | 1278 |
| 神戸長崎間 | 389 | 2 | 2093 |
| 長崎上海間 | 412 | 3 | 1308 |
| 上海瀋陽間 | 433 | 4 | 87 |
| 瀋陽香港間 | 451 | 4 | 1110 |
| 香港新嘉坡間 | 1437 | 5 | 333 |
| 新嘉坡ペナル間 | 396 | 2 | |
| 合計 | 4948 | | |

○佐々木達君通信第四

(十月六日スエズ港發 小川教授宛)

「アdeen」に着したのは十月二日午后一時停泊時間僅に三時間半にして午后四時半出帆せり

前停泊地「コロンボ」と「アdeen」との間の旅程中最も長き航海にて海上二千〇九十八哩日数は普通九日を要するが幸に海上極めて平穩で疊上を行くが如く稀なる上航海だろーで二日早く着いた加ふるに余程目的地に近付て来て樂みも増して来たから割合に退屈と少なかつた又時候も冷しく恰と云ふ時候であつたけれども一週間海上に居たのだから又「アラビヤ」地も跨いで見たかつたから上陸の豫定であつたが階子の下し場が普通の反對側であつた爲無益に時間を費し且停泊時間が短かりし爲め始て上陸が出来なかつた而して前の第三報を船内郵便函に投じた外は一も家へ着報知を出す事が出来なかつた前日と漸く書て置きながら始て失敗した是迄其到着地で其他繪葉書を買ひ其他の印紙を貼付し其地の郵便局に投じて来たが之は少し無理な事で余程機敏に行はねば六ヶ敷是迄のが一体出来過て居たのだ夫れよりも到着前日中に前停泊地の繪はがきを船内の郵便函に投ずるは安全なのさ右の如く上陸が出来なかつたけれども船中から遙かに望んだ處では「アdeen」と云ふ所は岩石の上に家が建た様な所で草木は少しも見る事は出来ない家屋散在してある且暑いのみにて見る可き者はないと云ふ噂だ正に到着前日より暑氣加はり十月二日でも出發當時の暑氣に戻り又薄きハンドンの服を着る事になつた是れから紅海中は見切りて地

中海に入ると急に寒くなり外套が入用になるの―だ「ア
 デーン」上陸の失敗談かない代りに今日迄の面白きトッ
 トキの面白き失敗談を御披露しましよ。

話がチト古いが頃の九月四五日頃未だ船内の様子に慣れぬ出發掛けでした神戸長崎間の出來事だと思つた食堂に入る吾輩は並んで着席して居た向側には佛人の男一人女尼二人並て居る葡萄酒の瓶がツツ立てある之を飲んで宜しいか否か一向分らんする向側の佛人は皆飲み始めた夫れでは當方も飲んで宜いのであろ―と先づ僕一杯飲んだ同行の二人は余り飲ぬ方だから其日飲まなかつた翌日食堂に入ると又中央に葡萄酒の瓶がツツ立てある又佛人は飲んでをる今度は同行の一人が飲み始めた次で僕一杯遣らした儘で三日目に食堂に入ると向側の佛人の相變らす赤酒を「コップ」に注いで瓶を「テーブル」の下に入れて尙同じ「テーブル」の内に獨人三人と佛人か三人と向ひ合せて居る而して「ビール」を飲んだり葡萄酒を飲みたりして居る能く見ると酒類は一々請求して飲んで居る又赤酒一瓶を求め食事毎に飲んで居るものもあるして見ると吾輩の飲んだ赤酒は向側の佛人の買入れたものらしい全く夫れに違ないので船の食事に之氷水の外は飲料を出さない希望のものは特に買ひ入れて飲むのであるのと知つたして見ると甚た面目のない次第である之に謝す

るにも其辭を知らず例へ強て佛文を作る事をしても斯の如き出來事に對する風習が分らない佛人の領分を多少占有したと考へしは時局の際愉快な様であるが何んだか心持か宜敷しくない毎日三回宛食堂で逢ねばならぬ兎も角大失敗を遣らしたので到底換へずに出來ない事になつた三佛人の新嘉坡で下りたのでと―ん、無言で分れた處が殆んど一ヶ月を経て十月一日に至り首尾能く御換へしが出來たから不思議だ恰も新嘉坡で前三佛人に入り變り又親子三人連れの佛人が「テーブル」の向側に並んだ其の后「ベナン」「コロンボ」等を経過する間は別に變つた事も無たが「アーデン」に着く前夜喫烟室で茶菓子若しく之酒の肴にして居る福神漬の残り鐘を食堂に持ち込んだすると向側に怪しき御馳走が出ると思つて居たらしいすると同行の一人が此福神漬を少し取るや否や向側の妻君が直ちに之を福神漬の鐘中に投じ皿に吸ひ入れて食した吾輩三人と笑ふ事も出來ないすると息子の母に注意したらしいと見えて向側の三人と互に笑ひ出したけれども何を言て居るのが分らん當方の失敗と同一で先方にも言語通せず今日に至るも何とも摺合せない、ろ―して見ると前日當方の失敗に換摺もせずに分れたのの左程過ちてなかつたと思つても宜かる―のみならず同國人も同事件で返禮をしたと成るろ―さ。

序てに船中の飲料に就て話して置きましやう佛船にて赤酒を「ゼロ」で隨意に飲むろ一だが獨乙船で之蒸溜水水の食堂で之勿論廓下ても氷水罐が備付けてあつて何時でも飲めるが其他の買ねばならぬ「ビール」赤酒「ブランドー」「リモナード」炭酸水等何でもある「ボーイ」の持て來る小片紙に「ビール」小一杯(Bier, K.)と記し姓名と室の番號を記入せば夜十一時迄は何時でも持て來る多くの船客は三食の時は勿論食事の間でも盛に飲んで居る特に夜が多い吾同行者は皆余り飲まない最初は一週間小一杯位だつたが此頃之時々飲む事になつた「ビール」は氷漬にしてあるから暑いときは中々甘いよ

英語は獨船に乗て獨國に研究するのみなれば必要はないか途中上陸するには是非其英語が必要な英語通さいすれば單獨に歐米諸國を巡遊する事が能ふと思ふ位だ僕の上陸した各位は獨乙語佛語も通せぬけれど英語の通せぬ處はない宿引物價錢より馬車夫に至る迄殆んど英語の通せぬものはないのみならず獨船船員、獨客、御客でも皆最初は英語で話しかけるのが普通た佛船でも此様子では同一だろーと思はれる又上陸及船内の日本人も皆英語を語り日本語の中に英語を混じて話して居るだから日本人間の話でも英語の通せないものは馬鹿氣に見ゆる、斯る風だから廣く交際(船内)をするには英語を話す事か必要た

特に船内では多人數に話の出來るのは愉快た之に反して多數人の話か分らないのは誠に不愉快た幸に我船は獨船だから多少話か分るから愉快たけれども若し佛船に乗たら英語の出來ない人は非常に不愉快だろーと思ふ斯る工合たから勿論船に乗るには英語は必要だ是れて將來の戒の一言を申して置きます

余が一行は神戸法學士の上陸時の應接を擔當し僕と船内の獨乙語に通する者と交際し上陸の準備をする云ふ順になりて居るこゝなつたの僕は多少年長ずると見ゆ且服装か正服(とは大きけれども)即ち普通服装立襟でないから話し掛ける外國人皆先づ僕の所に來るだから他の二君は余り外國人と話さない様になつて僕に「セントルマン」と云ふ名を付けて交渉之僕が煩す事になつた其實兩君之惰怠て徒らに年寄を使つて居るのだ

斯の如き風だから僕等の一行は幸に先づ都合よく大失敗もなく又外國に居る様な心持もあり平氣に暮して居ると云ふて宜しい

○木村博士の書信

(醫科四年級幹生宛)

御手紙拜誦時下寒氣日々相加り候諸君益御勇健御研學之段大慶至極に存候次に小生も不相變無難勉勵勤務罷在候間乍憚御休神被下度候扱て小生の御校を辭してより將に

二年を經過し御校にて授業致したるは今や諸君の學級而已と相成申候諸君が國の紳士として獨立活動の日は遠にあらざ御卒業の頃と恰も國家多事の秋に際し斯道の人物を要する益多々なるべく諸君益御勇健御研學の程祈居申候又諸君交誼の厚き今に御忘もなく今般態々美事なる金牌御贈被下實に感涙致候小生は終身の最も光榮ある紀念品の一として保存可致候右御禮寄贈者御一同へ可然御傳被下度願候久敷拜眉を得ず候處前記の事共彼此回顧致候得者今昔の情實に忍び難き所あり來年夏休業中或は御地へ參り親敷御禮等述ぶるを得ん乎と樂みに存居申候
右不取敢御禮旁申上度時下寒氣相加はり候御自愛專一に奉存候以上 (三十七年十一月二日)

○贊助會員松王數男氏の通信

○大阪に於ける同窓會開會 豫て計畫致居候我校出身者會合を本月三日大阪船場備一亭に於て第一次開會として舉行仕候此度は木村博士の快氣祝を兼ての事に候故(博士病褥に附かるゝと數句、先月末全く快癒せらるゝ)四方に飛檄候も時局に制せられたか會者尠なく當日ハ木村恩師を圍繞して小島佐藏君、森岡惣太郎君、政山辰雄君及ひ余と併せて五名、和氣團樂有益なる恩師の實見談を拜聽しつゝ杯を交へて懇話數刻遂に次回の會合を約して愉快

に相散し申候
我同窓會も自今漸次盛大に一致團結鞏固なる提携を計らんと期し居候、阪地附近に在る我か同窓會諸君は是非其の所在を木村博士の下迄にも御通知を玉わらば博士を槩子として時々會合懇話仕度、博士も亦大に冀望翼賛せられ居る所に御座候故第二次、第三次、次第に盛會を重ね度存居候 (於大阪南區桃山高橋病院)

○松原氏米國雜信

流石筆快めな三郎兄も余程仕事忙しいと見へ渡米以來は何れへも頼と不沙汰勝ちの様で吾等同窓寄れば觸れば何時も「松原君はドウして居るたらう」と云ふが出来る位である。予幸ひ此頃兄が母君を訪ひ參らせて彼地からの通信百余通を一覽し得たれば今母君の許を受け其中で兄が昨今の動靜を知り得るものと彼地の氣候人情、風俗、などの様を窺ひ得るものと若干を日附の所に積き記して同窓諸君へ御披露仕様と思ふ。去りながら兄の通信の多くが忙しい中て認められた繪葉書であるのと且つは本誌の紙數にも限のある事故短い中から又成るべく吾等よ要なき事を削り除きたれば讀む諸君が嘸や靴を隔て、何とやらの感に堪ひられぬ事と思ふが其邊は幾重にも御勘辨を願はねばならぬ

追つて兄は一昨三十六年十一月十七日に横濱を解纜し
同十二月二十四日の午前十時に紐育に安着せられし者
故讀む諸君其れ積りて (同窓雜誌)

日本人の旅店に泊りて都合よろし(シヤトル)

西洋の町は日本の町と異り地圖さへ見れば獨りて何處へ
ても行かれる故頃日は獨りにて當地醫學校、病院を參觀
致し居り候(桑港)

當桑港は日本人甚多き爲め半分は未だ日本にある心地致
し候(桑港)

シカゴ市は寒氣甚しく道路は一面に氷りて歩行時に滑る
事甚し寒飄耳にこたへ申候(シカゴ市三十六年十二月廿
二日發信)

野原一面に雪四五寸あり(デトロイト市二十三日)

ニューヨーク市は

シカゴ市より 九百五十四哩

桑港市より 三千四百九十七哩

シヤトル市より 四千四百五十五哩

差し當り當市東百三十三丁目六十四番地樋口旅館と云ふ
日本人の旅館に宿泊仕り候故萬事都合に御座候(紐育
市十二月廿五日發信以下凡て紐育市發故日附のみ記す)
時々雪降り寒風吹きて随分に寒さも家の内は甚溫暖なり
(二十九日)

本日午後二時出校所長に面會仕り候處所長之甚親切に世
話せられ大に好都合に御座候(二十日)

今日も研究所に行きて器械及び藥品類を整理したり來正
月四日より勉學可仕候頃日は降雪止みたるも寒風ありて
道には一寸計り雪積りて解けず○西洋の歲暮は日本と異
り此日寺にて説教等をなし人々は概ね徹夜仕り夜十二時
となれば諸會社よて凧笛を鳴らし又所々に花火様のもの
を上げ又小兒之喇叭を吹きて道路をかけ廻り往來人迄に
も徒らをなし夜二三時頃に至りて眠に就く(三十一日)
是迄甚だ嚴寒にて馬が道に斃死するを見たれども六七
頃より稍溫暖となりたり(三十七年一月十日)

町に馴れ日本にあるが如き心持せられ申候(十七日)

目下日本人の下宿屋にありて日本人と一所に食し起臥し
て居る故西洋に來た氣がしないから西洋人の家へ下宿し
様と思ひ新聞に廣告したら應ずる者があつたから今夜行
つて話して見たら陸軍少佐の家で今朝他の人へ約束した
から氣の毒様と云ふ事であつて甚だ親切に云ふて呉れ
た西洋人も大變頼しい者であります(二十五日)

街道には皆シツクイとか石とかが敷いてありますから雨
が降つても雪が解けても金澤や東京の様に汚い事はない
併し凍て居るから道が滑るには困ります(三十一日)
露國の軍艦十一艘を打ち沈めた(中略)……外國に居ると

一層戰爭の事が心配になりますが……一日中に十二回も新聞が発刊せられ今朝の戦争も其日の中に知れて金澤に居るよりも早く聞く事が出来ず米國の人々は日本びいさで小生共を譽めて呉れますから誠々樂みて……夜中には夜の新聞がありますどの新聞でも戦争の繪があります(二月十日)

段々寒氣薄らぎ(十八日)

旅順港は未だ陥落せざる由(三月三日)

米國の村落は小立野の西洋造家の如く板葺木造なり紐育市の家は悉く煉瓦(三日)

或る新聞は一時間毎に新しく發刊します……道で知らない人でも色々戦争の事を話し掛けて日本を譽めます(八日)

近頃は當地も春の暖さになりました(十二日)

十三日に雪降りたり……昨夜副院長によばれて御馳走になりたり(十七日)

一昨十八日夜先生の宅にて醫士の會あり其節小生も日本精神病者の狀況を(昔から今に至る迄の)演説せしが大に好評を得たり終りて一寸した御馳走になりたり本二十日は日曜にて先生の奥様が友達とブロンクス公園に遊びに行くから一所よ來いとの話で朝九時から瀛車まで全公園に行き他も二人の同伴者ありて動物園と植物園とを見物

して一時半瀛車にて先生の宅へ歸り晝食の馳走になりて午后の間永らく話をし午後五時歸宅しました此先生の奥様と非常に親切なる人にて小生を吾子の如くに何呉れとなく世話せられ此度の時の演説の草稿も直して貰ひたり毎日研究所へ來られるから晝飯後一時間奥様と話して英語を馴らして居ります大變仕合せで喜んで居ります(二十日)(以下次號に)

○木下克雄君の通信

(小川、八田両氏宛 最近通信の一)

拜啓仕候益御清榮之段慶賀の至りに奉存候御地此頃天候悪しく候由幸に御自愛專一に存候當地方は過日來頗る長閑にて誠に暮しよく有之候處本朝よりは北風吹き荒み中々寒さ厳しく此模様にては雪となるやも難斗何分當地方の如く昨日迄は非常の暖さと思へば早や本朝よりは俄の氣候の劇變殊更に身に感じ申候併し小生は愈出でて愈壯健に勤務罷在候間御安慮被下度候

過日も一寸申上候處去月廿六日より第四回總攻撃は全方面共に豫定の功果を擧ぐるに至らずして一先づ攻撃中止と相成候も獨り我第○聯隊は其正面の舊支那圍廓の凸出部たる敵の散兵壕を奪取し今や我守備線の中に屬するに至り候第七聯隊が行動を起すや假令一部たりと雖其功果を收めざる事無之全軍皆第○聯隊の勇奮に感歎致居る摸

様に御座候過日軍司令官より賜はりし第七聯隊への感状は昨日下附せられ申候小生は偏ま此名譽なる聯隊の一員として勤務するを得るに亦大に小生の名譽と喜び居り候御承知の通り第○師團方面に屬する二百三高地なる敵の砲臺は要塞堅固にして若し之を奪取せらるゝに至らば敵は其死命を制せられたる譯ゆへ敵も從て死力を竭して防守し全力を注ぎ居る次第にて最頑強に抗抵し既に再三の攻撃にも未だ全果を收むるを得ざりしが新着の精銳なる第○師團によりて過日の總攻撃後引續き攻撃を行ひ劇戰殆んど三日に渡り終ゝ右二百三高地赤坂山及附近の二ヶ所を悉く占領するの光榮を荷へ候此二百三高地よりは旅順の港内は勿論新舊の市街並敵の全防禦線の後方と悉く瞰下し得て一敵の行通をも容易と見るを得べく若し夫れ此高地と有力なる砲を据へて瞰射するに至らば敵も取りては不利謂はん方なく要塞市街、港の内外擧げて損害を受くる次第に候へば向後の狀況は我に取りて頗る面白きとならんと存候、昨日も我巨砲の間接射撃によりてレントウ井ザン、ツエザレウイツチは半は沈没しベレスウード、ポルタワの大損害を受けたる由之も定めし右高地より觀測しての間接射撃にて如上の功果を收めたる義ならんと思はれ候尙一昨日は市街に火災を起し申候由今後時々狀況御知らせ可申候間後々をお樂みに御待ち被下度候

尙序て乍ら左よ珍談を呈し候過日の第四回攻撃に於て我軍の損害多數死体と累々算を亂し轉た悽然たり十二月三日我より通譯官をして敵陣に向ひ我軍は死体を收容せんと欲す其間彼我共に一時射撃を中止せんことを申入れしむ暫くして敵軍より承諾の回答に接せるを以て我各方面よ於て之其正面に於ける幾多の死体の收容に取り掛れり我第一大隊に於ては大隊長粥川少佐鈴木副官及小生の三人は看護長看護手擔架卒を率ひて赤十字旗を掲揚し擔架を携へて我陣地を進出す彼我守備線の間隔は約五十迷突兒なるも猥に敵壘に近接するを得ず彼我の中央点を限界として此方に存在する死体は其儘我陣地に向ひ搬送し彼方に存在する死体は敵方の擔架卒に依て境界点に運搬し我擔架卒は之を受取りて后方に搬送す故に敵方擔架卒も亦此点より近接するを許さずして此方に存する敵屍は同しく我擔架卒に依て之を敵擔架卒に附與す此運搬中敵將校十一名中央点に進み出してしを以て彼我共に握手の禮を行へり中に聯隊長及海軍士官二名を見たり續て我將校も集合し來り一座大に賑ふ我は豫め用意し來れるブランドの栓を抜き彼れ敵將校等を襲す彼我互に談笑し又他意あるものゝ如くならず併大隊には通譯官附屬せざるを以て初は互に意思の疏通をなし得ざりしが敵將校中獨乙語又は英語を解する者あり幸

にして且つ談し且つ飲むと雖互に戰鬪に就ては一言も及ばず單に雜事を談するのみ小生亦生嚙りの英語にて一將校に向ひ酒の好否を問ひしに彼は大に好む旨を答ひ且つ日本のアサヒビールを望みたるも生憎アサヒビール無かりしを以て不得止エビスビールを與へしに彼れ喜ぶこと限なくエビスビールをアサヒビールなりと思ひ瀕にアサヒビールくくと連呼しつゝ其仲間と共に愛飲せり彼亦或は手帳を出し小生に姓名を記せんことを乞へるを以て小生は英字及日本字にて大日本陸軍二等軍醫木下克雄と記し與へしに彼は又余の手帳に正直に隊號迄も附記して呉れたり斯くして二三の者と名刺の交換を爲せしに一敵士官は小生の所持する鉛筆と彼の鉛筆と交換せんことを望めるを以て紀念の爲と思ひ云ふが儘に交換せしに尙も彼は余の時計に附せる呼笛を見て彼の有するものと交換を望みしを以て是亦交換を諾せしに他の一將校は紙幣、銀貨、銅貨の交換を望めり依て小生も好奇心に壹圓紙幣、拾錢銀貨、壹錢銅貨を出たし之を交換せり然るに今回の一將校小生の佩ぶる軍刀をさも珍らし相に打眺め且つ曰く貴官の軍刀と予の軍刀の交換を望むと依て小生は嚴然として次の如く答へり「日本軍人の帶ふる軍刀は則ち日本軍人の魂なり寸時も之を手放すを得ず斷然謝絶す」と敵

將校は再三強請せしも同様謝絶せしに漸く斷念せしもの如く遂にまた再ひ之を言はざりき斯くして尙も敵味方打交はりて談笑せしか約束せし時間至れるを以て互に握手敬禮し各其陣地向ひ袂を分てり

以上の如く流石は文明國同士の戰爭のことゝて今の今迄對陣し射撃を交わ居りしものが斯くの如く戰場に互に酒を酌み語を交はし殆んど敵味方なることを忘れ居るもの如きは眞に古往今來我が寡聞なる殆んど之を聞かず又今后再び斯る場合に遭遇することありや否やを保せず即ち小生が從來遭遇せし事實中の最も珍談異聞として且つは陣中の一大佳話として貴聽に達する所以なり尙後にて聞けば他方面に來れる敵將校は通譯官に菓子を托し之を赤帽を被れる人(即ち將官)に贈り呉れと申せし由なり又日本酒を樽入の儘敵將校に贈りしに彼は直に燭を附けて持ち來れりと露助も亦日本酒は燭を附けて飲用するものなる事を知れりと見ゆ昨日及本日は敵の軍使二百三高地に來れりと而して午後三時水師營に於て我軍使と會見ある筈なり要件は死体收容の爲よして今回は敵方より申込みしものにして或は近日中再び過日收容残りの分を收容するの運に至らんかと信ず

扱御両君に呈する珍談とは右の事實よ有之候が隨分面白き話と思召さず候はずや小生の交換せる諸品と紀念の爲

保存致置候儘凱旋の節之貴覽に供すべく候二百三高地占領の此後の経過ハ如何になるべきや降伏かそれとも尙抵抗を續くるか恐く敵ハ大損害に耐はず折角密輸入を企てたる船舶之未だ貨物を荷卸しするに至らずして瞰射せられ終に糧食彈藥の全欠乏となりよし老鉄山に立籠るに至るごも肝腎の兵糧絶無となるを如何せん今や陥落の時日を問ふの要なし結局白旗を掲ぐるに至らんと存候ステツセルも最早人道の爲に降伏する方至當なるべく若し然らずして飽迄抵抗の態度に出づるあらば市街となく港内となく只滅茶々にするあるのみに候聞けばステツセルと降伏を主張するもスミルノフなる要塞司令官之を承諾せずとか何程氣張り候ても何れスミルノフは隅の方へ逃げ込む外あらじと存候

供の如く奴の一轉するものに御座候此小供此奴には即夜忠節信義禮儀武勇質素なる五ヶ條の勅諭を授けられ候之れ一に軍人精神にして諸般の思想も茲に一掃せられ如何なる粗食も如何なる過勞も如何に生理學的理論に反するも凡て之か爲に打破せられ肉体は毎日驚く程に動き居り申候而も目前の最大愉快とする處之練兵後の酒保に候泥糞のうどんやしるこを餓鬼の如く食ふことの如何に頑勢なさ只モ一其際之乞食の群集と云ふ有様に候此等の乞食が上官の命にて人形の如く働さ一度戰場に進めば死を鴻毛よりも輕しと正義の爲人道の爲勇奮激闘するかと思へば只茫然たるの外無之候

十二月七日〇〇山砲臺某陣地第〇大隊本部に於て認之

〇笠雫吉郎君の通信

(小川、八田阿氏宛)

(前畧)入營後知り得たる別世界の有様一二申上候間御笑被下度候

兵營の門を入り代るに破れたる小倉服を着くれは則ち小

一體營内生活と案外單純なるものにて候規則の下に服従の下に凡ての動作を爲すと云へば随分不自由の様に思はるゝも而も決して然らず凡ての動作皆君國の爲且つは人道を明にする爲と思ひ命を懸けて勉むれば萬事「何のその」に御座候凡て人間の事業は精神の如何に在ることも益感せられ候本日行ひし執銃体操の如き腕が切れるか眩暈を起して倒るゝか何れか一つと覺悟してなし候處拙者よりも偉大なる腕力ある者の中途倒れしは係らず終まで持續致すを得いたく隊長より賞められ申候

る事と思へは日々愉快を覺む候終生此精神を保ち度愈練兵致居候

練兵外に兵營及武器の手入にて一日中の二時間も之か爲に潰ぶされ手紙書く暇も無之候就床后暫くの間は万感交々起り身をもかく事有之候其都度悟道の足らざるなりとひたすら心胸を砥勵すれば終に快感を生じ大愉快に候新聞雜誌の見るを許されず世の事は眞黑暗にて頗る吞氣なもののに御座候御手紙被下節は拙者苗字に「リュウ」と假名を附け被下度願上候(后略)

十二月十三日小倉北方歩兵第四十七聯隊第七中隊にて

○三野賢吉君の通信 (十一月六日發八田氏宛)

大連灣頭颯々たる秋風はすでに去りて寒風征衣に徹して祖國の秋を想はしむるの時大兄益御壯健奉賀候前便紀念繪端書にて御承知の如く小生十月七日附を以て急に佐世保海軍病院より海軍病院船西京丸乗組を命せらる、丁度傷病者を後送しつ佐世保港頭碇泊の本船に十日の夕を以て乗船、冬向防寒の準備やら外科の分擔の整理に一時多忙を極めたり、十日の夜は海上生活の幕開き舷側を打つの波浪を聞いて夢破らるゝこと度亦度、船は翌十一日正午出港して午後の三時頃は本土の最南端なる伍志岐の燈臺を左舷に眺め針路を西北西に取る怒濤高くし

て船の動搖著しく上甲板はなべて浸され左舷に傾けばざざざ右舷の水は此に來り右舷に傾けばざざざ左舷の水は彼に流る、一步も士官室外に出るを得ず、折柄一杯の珈琲は胃部の壓重と惡心を催し身体はふらつき歩行は出來ず大に困難呼人知れず一回の嘔吐！君よ笑ひ玉ふな、翌日聞けば其に出港した京城丸は伍志岐灣に避難したとの事、以て其如何又風波烈しかりしかが分ります、此日夕飯も畧して士官室を出で中甲板の私室に歸りてベットに入り舷を敲て花と散る浪の音を友にして曉まで眠を續けた、翌日は幸にも海上平穩、八口浦の沖を通りて正午想ひ起す十年前の大海戰場たりし海洋島を右にして某地點に碇泊した、此所は海軍第○の根據地！遙に彼方狹子窩の海岸を眺め點々たる島嶼の中に先月下句迄は時々旅順沖なる封鎖艦隊へ患者收容に往き來すると云ふ聊か單調なる生活を繰返して居たが、廿八日頃よりは碇泊地を變換して青泥窪となつた、始めて人家を見た時の愉快は何とも云ひ様がない、頃は同じく隔日に朝青泥窪を出て旅順沖へ行つては各艦の間を廻りて患者を收容し夕亦歸ると云ふ次第、日暮遼東の彼方大陸に太陽の没するを觀るときは終日の勞もうち忘れ果つる、而も此頃は大連灣も波高く時としては艦隊所在地へ行かずにも歸ることもある、よしや風波かねかして行くも各艦よりポートが落

されぬ仕末、一日の價は少からぬ淡水と石炭を費し、我等には獲る所只身体の動搖と悪心と頭内朦朧感のみ、是も旗艦の命令、皇國の爲と思へば是非がない、祖國の秋今頃はステッキ悠々小春日和に菊観や紅葉に洒落れる人があるであろ！

今更ならねど遼東の大軍は嘸いらい事である！吾等は暖きストーブの通つた士官室に一日を送ることが出来るが未だ防寒衣が充分ならぬ陸軍諸將卒嘸や嘸辛い苦しい思がするてあろ！

隔日位に必ず風波が高いが若し此際一發の浮流水雷に出喰すなら、憐れ三千噸に充たぬ我船は果敢なき運命に陥るのである、若しそんなことが起つたなら祖國の輿論は如何かであろ！(中畧)

此間青泥窪に上陸して散策に樂しき日曜の半日を送つたが久々にて地上を歩んだ愉快は船乗の言辭なれど到底船頭者ならぬ人々には分らない、支那街と露西亞街の二區に分れ既に大山町、兒玉町、落合町など名けられてあります、大山通は最宏壯、効外の森林中に動物園があるが一時新聞に出た日本婦人を喰つたと云ふ虎の外に熊が二疋、丁度上野動物園様の体裁に成つて居る、又露西亞町の中央に公園があります、テニスのコートが二個、夕飯後にクラブ人の運動場は今や負傷兵の散歩場となつて居

る、支那人は昌んに露西亞煙草を賣つて居り、五圓札を出して釣銭に銀貨を呉れと云ふ次第之も連捷の御蔭、支那人は利徳上なら何んでもせぬことはない、日本語は中々上手に練つる

天長節は正午は旅順沖にて游弋艦隊と共に滿船節を施して皇禮砲と共に上甲板にて遙に東方を拜し 陛下の万歳を三唱した、晝飯は日本酒に郵船會社の料理に万歳を奉賀し、夕飯は青泥窪に歸りて韓國皇帝よりの三鞭酒を舉げ軍醫長の發聲にて一同起立高く杯を上げて君が代の千代八千代を祝した、大洋の上にて天長節の大節を迎へた我は短き生涯の中には決して忘るゝことの出來ぬ大なる紀念を忝くした

堀井君は乙羽艦に乘組み最も危険なる行動を取りつゝ、あります………があつた、然れども幸に天祐は乙羽にあつて君はいよゝゝ健在である

土田君は内地よりの運送船(石炭)京都丸に乗船、亦健在なり

玆に一つ餘りに痛ましい氣の毒なる報知がある、其は福岡丸軍醫長鈴木大軍醫の事である、此間神戸丸にて佐世保に歸られたが、初め窒扶斯の疑いあつたが檢痰上結核菌が無數との事、但し胸部變化はなき由、嗚呼俊秀君の如き吾等の常に師表として先輩として敬慕措かざるの人、

切に自重自愛快癒偏に是れ深く祈る所(后畧)

○在遼陽松田研吉君の通信

(十二月三日發)
(十全會宛)

謹啓追日寒氣相催候處益々御揃ひ御多祥の段奉遙賀候其後は打續いて御動靜御伺不仕多罪奉謝候實は時々不怠は通信可仕期し居候得其何分後方部隊に屬し戰線を去る事遠く隨て珍敷出來事も無之且つと勤務に取紛れ意外に欠禮仕候段不惡御諒知被下度候

扱て補助輸卒隊なるもの、任務の苦勞の程度に至ては已に世評にて御承知の御事と存候得共疎遠の申譯旁左に狀況の一斑を申上候

去る七月十八日安東縣上陸以來戰局の發展に伴ひ後方勤務も亦繁雜を加へ殆ど寧日なく炎暑を冒し冷雨に曝され山又山を糧秣輸送に日も之れ足らざる有様にて殊に八月十五日雪裡店出發十九日連山關着の行軍の際の如きは連日の降雨にて道路は一面に泥海の如く下腿を沒し車軸を埋め行進非常に困難にして豫定の行程を取る能はず遂に大雨を冒し泥中に夜を徹するの止むなきに至り隊は連絡を失ひ各自自由行動を執るの外なき姿にて如何共施すべき術もなく斯くすること殆ど三夜に亘りしことなれば驚くべき多數の患者を生し途中各處の患者療養所へ入院を托せしものにしても殆ど百名に上り其他歩行難を訴へたる

者に至ては實に全員の四分の三以上に達したり之等の患者は主として連日泥中を跋涉河流を徒涉し趾間及び足背は砂礫に摩擦して濕疹に罹り又は下腿の浮腫麻痺を來し全然脚氣病を誘起したるものにして最も慘狀を極めたりしも時恰も遼陽總攻撃準備に際し軍需品の必要は益々多きを加へ休養の余日を興へず一日間休憩の後直ちに摩天嶺を越へ關帝廟へ前進し又々廿七日甜水店へ前進或は榛子嶺を越へ河欄溝へ或は寒披嶺を越へ黃泥崗へ連日輸送せし事なれば患者と益々其敷を加へ日々現在患者七八十名に上り衛生部員としてと小生外看護長一名代用看護手一名のみにして一面之等の患者を取扱ふと共に一面輸送に隨行不慮に備へざるべからざる有様にて一時は最も多忙を極め申候十月十三日橋頭より東溪湖へ前進十八日を以て又々甜水店へ復飯廿日より第一軍の所屬を離れ遼陽守備軍に屬し廿二日出發廿四日遼陽着目下滿州倉庫遼陽支庫付として停車場勤務に御座候得ば一般輸卒の勞苦も大に輕減し以來山又山の間に於て汗水流して苦しみしも今は一場の苦話となり宿勞次第又癒へつゝある次第に候へば患者も大に減少し目下日々三十名内外(總員補充兵を合して四百三十名斗)に御座候而して今日迄に入院せしめし患者は二百七十五名にして内入院後死亡せしもの二十名に御座候

之等の患者は約九分は脚氣病にして他は儂麻質斯消化器病にして陣中最も可恐傳染病の如きは赤痢二名腸窒扶斯一名(二名共入院後死亡)のみに止まりしは實に幸福の至りに御座候之の脚氣病發生に就て之其何等に基因するや全然不明の裡に包まれ上陸以來沿道各地に於ける飲料水の如きは豫想外純良にして豫て内地より携帶せし清淨用の明礬の如きと遂に一回も使用するの期もなく又食糧の如きも前進行軍を除く外は常に一定の處に居住し一定の任務の下に行動しつゝある有様にて隨て供給も不十分なる点もなく殊に遼陽着次第麥飯を用ひ氣候は愈々其度を重ねつゝあるにも不拘病勢減退せざるのみならず切て増進の傾向を示しつゝあると寧ろ意外とする所にして一意防遏に苦心焦慮中に御座候是れ或は以前の勞働過多の爲め身体組織の抗抵力の欠乏せるに素因する者ならむかと存居候得共如何に御座候哉兎に角軍醫部の主旨たる患者を永く隊に留め置かず勉めて速に入院せしむべき方針にて藥劑行李の内容の藥品の如きも僅に數種に止まり藥さへあれば十分快復の見込あるものと雖も入院せしむるの止を得ざる姿にて醫術研究上資する處尤も少なきは實に遺憾に御座候當地は近頃寒氣頓に加はり室内氣溫攝氏五六度を昇降致候得共防寒設備完成致し居り候得ば御省慮被下度候小生も以來益々壯健にして勤務罷在候得共未

だ寸功も無之只々月日を徒消せしのみにて御一同様に對し實に慚愧の至に不堪候其後層一層奮勵可仕期し居り候併て御放神相成度先と疎遠申譯旁申上度如此に御座候時下御一同様益々御自重被下度乍陰奉祈念候草々敬具

* * * * *

會 告

○交換雜誌及寄贈書目 (十二月二十二日迄)

- 日本醫事週報 五〇五六七八九〇二二(全社) 中央醫學會雜誌
- 六(全會) 醫海時報 五三三四五六七八九(全社) 東京醫學會
- 雜誌 八ノ二〇二二三(全會) 大日本私立衛生會雜誌 三五七八(全會)
- 日本眼科學會雜誌 八ノ二〇二(全會) 校友會雜誌 三五(京都府立醫學專門學校(全會) 東京醫事新誌 三三三四五六七八(全局) 京都醫學雜誌 一ノ三(全會) 順天堂醫事研究會雜誌 三三(全會) 研瑤會雜誌 六(長崎醫學專門學校(全會) 成醫會月報 三三(全會) 治療新報 三三(全社) 鎮西醫報 八五六(全社) 產婆學雜誌 五九六〇(日本產婆協會) 衛生談話園 五(通俗衛生茶話會) 岡山醫學會雜誌 二七八(全會)

- 北海醫報四ノ五(北辰病院研究會) 神經學雜誌三ノ八九(日本神經學會) 藥石新報五六七八九〇(全社) 好生館醫事研究會雜誌二ノ四、五(全會) 中外醫事新報九三、三(全社)
 校友會雜誌三(千葉醫學專門學校全會) 助産之榮三〇三(緒方助産婦學會) 藝備醫事二〇三(藝備醫學會) 醫學中央雜誌三三(全社) 醫事新聞七三、四、五(全社) 校友會雜誌四(山口縣立德山中學校全會) 產科婦人科學雜誌六ノ二、三(全會) 藥學雜誌三七三(日本藥學會) 國家醫學會雜誌二、三(全會) 臺灣醫學會雜誌二六(全會) 校友會々報六(石川縣立第一中學校全會) 醫談九六(全發行所) 廣島衛生醫事月報七(全社) 日本消化機病學會雜誌三ノ二、三(全會)
 東北醫學會々報三(仙臺醫學專門學校全會) 大日本耳鼻喉科會々報二〇ノ五(全會) 齒學研鑽五ノ三(富安齒科治療所) 皮膚科及泌尿器科雜誌四ノ五(日本皮膚科學會) 北辰會雜誌三六(第四高等學校全會) 日本助産婦新報六、三(全發行所) 躬行會叢誌二八(全會) 公衆醫事八ノ三(全會)

- 內科及診斷圖譜 一冊
 斯氏內科全書 自卷一五冊 至卷五五冊
 新外科手術學 一冊
 增訂眼科診斷學 上編一冊
 增訂內科各論 卷二二冊
 增訂新集外科各論 下卷一冊
 日本醫學史 一冊
 人體解剖學 第五卷一冊

○十全會々費領収

| | |
|------------------|--------|
| 金壹圓 (卅六年度一ヶ年分) | 津川 恒君 |
| 金參圓 (自三十八年度三ヶ年分) | 小原 貢君 |
| 金貳圓 (自三十七年度二ヶ年分) | 岡本京太郎君 |
| 金壹圓 (卅六年度一ヶ年分) | 國分 金城君 |
| 金貳圓 (自三十五年度二ヶ年分) | 林 義輔君 |
| 金壹圓 (卅六年度一ヶ年分) | 澤 賢吉君 |
| 金貳圓 (自三十五年度二ヶ年分) | 谷 中正勝君 |
| 金貳圓 (自三十六年度二ヶ年分) | 村田太二郎君 |
| 金貳圓 (自三十五年度二ヶ年分) | 關屋林之助君 |
| 金參圓 (自三十七年度三ヶ年分) | 永井 學造君 |
| 金參圓 (自三十七年度三ヶ年分) | 大櫛 秀松君 |
| 金參圓 (自三十九年度三ヶ年分) | 井上 只次君 |

(明治三十七年十月廿一日迄)

(會告)

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 金貳圓 | 金貳圓 | 金參圓 | 金參圓 | 金參圓 | 金參圓 | 金參圓 | 金參圓 | 金貳圓 | 金貳圓 | 金壹圓 | 金壹圓 | 金參圓 | 金參圓 | 金貳圓 | 金貳圓 |
| 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 | 自三十五年 |
| 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 |
| 二ヶ年分 | 二ヶ年分 | 二ヶ年分 | 二ヶ年分 | 二ヶ年分 | 二ヶ年分 | 二ヶ年分 | 二ヶ年分 | 二ヶ年分 | 二ヶ年分 | 一ヶ年分 | 一ヶ年分 | 三ヶ年分 | 三ヶ年分 | 三ヶ年分 | 三ヶ年分 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|-------|--------|
| 橋本監次郎君 | 河合忠次君 | 西屋岱抱君 | 福山可藏君 | 臼井順太郎君 | 勝木直吉君 | 高島一二三君 | 河合 鱈君 | 野村亮吉君 | 大橋 豐君 | 藤岡勝治君 | 富久尾 湊君 | 森田信雄君 | 橘 董君 | 後藤義賢君 | 伊藤昌平君 | 松村四郎君 | 小原芳雄君 | 下村義三郎君 | 渡邊順吉郎君 | 池田秀雄君 | 久津木勝作君 |
|--------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|-------|--------|

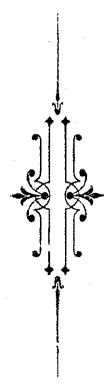
| | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 金參圓 | 金參圓 | 金四圓 | 金貳圓 | 金參圓 | 金參圓 | 金壹圓 | 金壹圓 |
| 自三十七年 | 自三十七年 | 自三十七年 | 自三十七年 | 自三十七年 | 自三十七年 | 自三十七年 | 自三十七年 |
| 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 | 度 |
| 三ヶ年分 | 三ヶ年分 | 六ヶ年分 | 二ヶ年分 | 三ヶ年分 | 三ヶ年分 | 一ヶ年分 | 一ヶ年分 |

| | | | | | | | |
|-------|-------|--------|-------|-------|--------|--------|-------|
| 山本長助君 | 山本幹雄君 | 村本笹次郎君 | 高橋常作君 | 三股梅吉君 | 種子田秀吉君 | 鹽井竹次郎君 | 德木千秋君 |
|-------|-------|--------|-------|-------|--------|--------|-------|

稟告

會計整理上三十五、六、七年度校外特別
 會員會費未納ノ諸君ハ此際速ニ納付相成
 度候也

明治三十八年一月 十全會會計部



廣告

日本消化機病學會

會員募集

◎事務所

東京市麹町區内幸町一丁目
三番地胃腸病院內(電話新
一六八)

◎會則綱要

- 一本會ハ消化機病ヲ講究シ其進歩ヲ圖ルヲ目的トス
- 一本會ノ主旨ヲ翼賛シ醫術開業免狀ヲ所持スルモノハ何人タリト雖モ會員タルコトヲ得
- 一本會ハ隔月一回常會ヲ隔年一回總會ヲ開キ學術上ノ演說談話討議ヲナシ又隔月一回機關雜誌ヲ發行シ會員ニ頒ツ
- 一本會ニ入會志望ノ方ハ氏名住所ヲ詳記シ捺印ノ上會費一ケ年分(金貳圓)相添ヘ事務所ニ申込マル可シ
- 其他詳細ハ御照合次第會則進呈ス

日本消化機病學會雜誌

第一卷(自一號至六號)
第二卷(全)
第三卷(第一、二號) 己刊

右各卷賣價金貳圓五拾錢每號一冊代金三拾五錢(但シ郵稅共)

東京市本郷區春木町二丁目

賣捌所 南江堂支店

(廣告)

明治十一年創刊(毎月二回十日・廿五日發行)

醫事新聞

〇〇〇一部 金拾五錢 郵稅金壹錢
〇〇〇三ヶ月 前金郵稅 共金九拾錢
〇〇〇半年 前金同 壹圓七拾錢
〇〇〇壹ヶ年前金同 金三圓三拾錢

本紙ハ每號菊判八十頁ニシテ臨牀講義、原著、寄書、質疑、學會、雜誌、抄録、等ノ他講話、官報、雜報ノ諸欄アリ而シテ臨牀講義、質疑診斷實習等ハ本誌ノ

特色

トシテ大ニ讀者諸彦ノ歡迎ヲ辱フス又毎月壹回獨逸大學最近學說集ヲ附録トシ己ニ其六ヲ了シ昨年十一月廿五日ヨリ其七トシテ

小兒腦膜及腦

水腫

アロフエツソル、ラー、コーツ述ヲ譯載セリ

見本 依例往復はぎきヲ以テ御申込ノ方ニハ 先着一千名ヲ限

十一月分(十日又ハ廿五日分)

一冊ヲ呈スヘシ

リ昨年十一月廿五日分御望ノ方ニハ先着百名ヲ限リ一冊ヲ呈上スヘキニツキ其旨御書添アリタシ但滿員後ハ十二月分ヲ發送スヘシ

東京本郷區元町二丁目四十七番地

發行所 醫事新聞社

後一



後篇下卷增訂第二版發行



醫學士 下平用彩纂著

（精巧插圖九百五十八個）

新纂外科各論

全部
 正價七圓四拾錢
 小包送料參拾錢
 但シ臺灣ハ貳拾錢増シ

●前篇上(頭) 初版

正價壹圓八拾錢
郵稅拾貳錢

●前篇下(頸胸脊柱) 初版

正價壹圓六拾錢
郵稅拾錢

●後篇上(腹) 三版

正價貳圓
郵稅拾六錢

●後篇下(上肢) 二版

正價貳圓
郵稅拾六錢

紛々タル現時ノ外科各論ノ中尤モ能ク時運ノ進度ニ應ジ取捨其宜シキヲ得タリトノ公評アルハ實ニ新纂外科各論ナリ本書ハ著者下平先生金澤醫學專門學校ニ於テ教鞭ヲ執ラルルコト多年ソノ日夕學生ニ講述スル所ヲ基礎トシ傍ラ博ク船載ノ新著内外學者ノあるばいご等迄ナモ斟酌シ斬新有益ナル圖畫ヲ挿入スルヲ每卷二百有餘ニ及ビ冗長ニ流レズ粗略ニ陷ラズ用意周密ニシテ首尾一貫セルノ好著トナルニ至リタルモノニシテ外科學講習者及臨牀醫家年來ノ渴望ヲ癒シテ餘リアルハ更ニ言ヲ要セザル所今ヤ後篇下卷第二版成レリ依テ茲ニ公告シテ普ク世ノ好學家諸君ニ報ズ

●發行所

東京本郷區龍岡町卅四
電話下谷一六七二番

吐鳳堂書店



卒業後ノ狀況ハ毎年其筋ヘ報告ヲ要シ候ニ付キ卒業後奉職開業轉居等一身ニ係ル異動ハ其都度本校ヘ必ス届出ラ
ルヘキ筈之處往々其運ビニ至ラズ爲メニ本校ハ取調方甚
タ差問候間今般左記雛形ニ依リ現今ノ狀況至急届出相成
度此段申進候也

明治三十八年一月

金澤醫學專門學校

届

私儀

一何々奉職或ハ開業或ハ何地ニ於テ實地研究肩書ノ地ニ
住所或ハ轉住仕候
一何々奉職或ハ開業ノ處何月日何師團何隊ヘ召集目下服
役中

何縣何郡何町村番地

明治何年卒業

何ノ誰

金澤醫學專門學校御中

▲投稿心得七則▼

- 一投稿用紙は中折紙を用ゐ必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記
入せらるべし
- 一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て没書とす
- 一誌上匿名を望まるも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし
- 一言の政治に涉り或は德義に背くものは一切登載せず
- 一未完の原稿は採録せず
- 一原稿採否の權は編輯長にあり
- 一一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治三十七年十二月二十八日印刷

明治三十八年一月一日發行

編輯兼發行者

石川縣金澤市廣坂通新道二十六番地
森 島 彦 夫

印刷者

石川縣金澤市尾張町八十二番地
宇野 孝太郎

印刷所

同所
活文堂

電話【六十五番】

發行所 金澤醫學專門學校十全會